

論 文

追加された2つの章： *Trollope の Clergymen of the Church of England*

委文 光太郎

序

Anthony Trollope (1815-82) が書いた英国国教会の聖職者に関する短いエッセイは、1865年11月20日から翌年の1月25日にかけて、およそ週に1度のペースで合計10章が夕刊紙の *Pall Mall Gazette* に掲載され、後に *Clergymen of the Church of England* (1866) としてまとめられた。彼はこの直前にもまったく同じ方法で、*Hunting Sketches* (1865) と *Travelling Sketches* (1866) を出版しており、執筆当初の彼の頭の中には、3冊目の作品としてのフォーマットがすでに存在していたものと思われる。

これら3作品に対する一般的な評価は、その読者数を反映するかのようになり、*Travelling Sketches* が最も好意的で、*Clergymen of the Church of England* の評価は思わしくない。その理由として、例えば R.H. Super は “We do far better to read about Archdeacon Grantly and the Reverend Josiah Crawley than to read the sketches of ‘The Archdeacon ‘or’ The Curate ”¹ と述べ、Hugh Walpole も同様に “the *Clergymen of the Church of England* are poor lifeless dummies compared with Mr. Harding, Archdeacon Grantley [sic], and Mr. Crawley.”² と指摘している。しかし、小説における登場人物の方が魅力的なのは当然のことであり、エッセイに対するこの種の批判は必ずしも適当なものとは言えないだろう。

8つの章から構成されている *Hunting Sketches* や *Travelling Sketches* と同じく、Trollope も当初は *Clergymen of the Church of England* を8章にしようと考えていた。しかし、第6章が掲載されてから4日後の1866年1月2日の出版者である George Smith 宛ての手紙の中で、“I want to do two more clerical sketch-

es - 10 in all - if that will not be too many.”³ と控えめながらも、2つの章の追加が突然 Trollope から提案された。結局、この申し出は受け入れられ、*Clergymen of the Church of England* には全部で10章が収録されることとなったが、それにより執筆当初に彼の頭の中にあつた作品全体の構想は必然的にわかりにくいものとなってしまった。そこで本論では、彼の当初の構想を明確にするとともに、急遽追加された2つの章に隠された意味を明らかにした上で、これまでほとんど注目されることのなかった *Clergymen of the Church of England* が考察に値する作品であることを証明してみたい。

1. 第1章から第8章までの *Clergymen of the Church of England*

各章のタイトルが示す通り、⁴ Trollope は毎回ひとつの聖職位に焦点を当て、限られた紙面の中で、その仕事内容や問題点、過去と現在における変化などを、将来的に小説に登場しそうな人物像を時に提示しながら指摘する。そして結論から言うと、第8章までをひとつの作品と見なした場合、最後の第8章が Trollope の最も強く訴えたい部分であり、残りの章はその主張、すなわち、仕事量にまったく見合わない副牧師 (curate) の不当な待遇の改善を読者に訴えるための御膳立てと言っても過言ではない。ちなみに、彼のこの意見は今回初めて明かされたものではない。*The Cornhill Magazine* の創刊号に巻頭で掲載されて好評を博し、その後の小説家としての運命を大きく変えることとなった小説である *Framley Parsonage* (1861) の中でも、“In other trades, professions, and lines of life, men are paid according to their work. Let it be so in the Church.”⁵ とはつきり述べられている。

Clergymen of the Church of England は、第1章の大主教 (archbishop) を頂点として、第8章の副牧師まで聖職位の序列にほぼ忠実に各章が配置されている。その中で、第5章の地方の教区牧師までは、程度の差こそあれ基本的に恵まれた境遇にある聖職者の様子が描かれている。しかし、第6章の都市部の牧師になると突然、その雰囲気が一変する。地方の教区牧師とは大きく異なり、彼らは収入も社会的地位も低く、主な収入源が教会の座席の賃料であるため、成功するには説教を興味深いものにして多くの人々を教会に集めるしか手立てがない。うまくいけば年収1,000ポンドになるが、失敗すれば200

ポンドでの生活を余儀なくされる。そして、ほとんどの者はうまくいくことなく終わる。⁶ さらに悲しいことに、万一成功してもその過程で “clerical excellences of charity and good-will” が失われたり、“special clerical duties for which our clergy are most valued” が蔑ろにされてしまう (76)。そしてこの章の最後で Trollope は、都市部の牧師に対する収入面での待遇が改善されない限り、ジェントルマンの子供たちが職業として聖職者を目指すことをやめようとする強い危機感を表明している (77)。この意識は、そのまま副牧師について語る第8章に引き継がれてしかるべきものである。それは、都市部の牧師よりもさらに悲惨な副牧師の現状についてひとしきり語った後の、以下に引用する第8章の終わりの部分を見ても明らかである。

But young men are now beginning to know, and the fathers of young men also, what are at present the true conditions of the Church of England as a profession, and they who have been nurtured softly, and who have any choice, will not undergo its trials - and its injustice! [...] but all modern Churchmen will understand what must be the effect on the Church if such [men of a lower class] be the recruits to which the Church must trust. (103-104)

つまり第6章と第8章の最後の文はともに、英国国教会という巨大な組織の底辺で懸命に働く聖職者の待遇が改善されない限り、彼らのみならず組織自体の存続が危ぶまれると警告しているのである。本来であれば Trollope はこの2つの章を続けて配置し、そうした訴えをさらに強化することもできたであろう。しかしそうではなく、大学のフェローに関する章を第7章とすることを彼は選択した。そして、そこには明確な意図があつた。

“The College Fellow Who Has Taken Orders”と題された第7章は、主教 (bishop) や聖堂参事会長 (dean) を取り上げている他の章と比較すると異質な感じがするかもしれない。その章で彼は、オックスフォード大学とケンブリッジ大学のフェローに対して無条件に付与される特権のひとつである聖職就任資格 (title) に着目し、長い間フェローとして過ごしていた人物がある日突然、結婚を理由に何の訓練も受けずに聖職者となることを執拗に批判している。この章に関しては Super も違和感を隠さない。

With this one [ch.7] I think we find Trollope somewhat out of his element. He did not know Oxford and Cambridge, and was inclined to feel a little sore about that ignorance. Hence the tone is rather mannered, the character never really emerges, and there is more criticism than character.⁷

一見すると、この第7章は前後の章の主張の連続性を分断し、第8章までを全体として見た場合にちぐはぐな印象を与えかねない。そんな危険を冒してまで彼がこの章を描いたのは、第6章の存在があったからである。すでに見てきたように、第5章までの恵まれた境遇にある聖職者に対して第6章の都市部の牧師は、地方と異なり競争する教会が周囲に存在するため常に需要と供給の市場原理に翻弄され、恩恵らしきものはまったくない。第8章の副牧師の方が当然深刻な状況にあるのだが、もしこの第7章なしに第6章と第8章を続けてしまうと、肝心の副牧師の窮状が都市部の牧師の存在により、強く伝わらなくなってしまう可能性がある。それを恐れて Trollope は、大学のフェローに関する章を間に差し挟むことにしたのだろう。副牧師となるフェローに関して “But the man who does so should have been ordained on the title of his curacy, not on the title of his fellowship.” (86) と批判していることから、彼がここで次の第8章を強く意識していることは明らかである。そして、第7章でのフェローに対する批判が強ければ強いほど彼らの恵まれた境遇が強調され、結果として次章の副牧師の悲惨な状況がさらに際立たされることも忘れてはならない。Super が指摘する「非難の大きさ」は、Trollope の意図的なものだったと言えよう。以上のように、最後の第8章において副牧師の窮状を可能な限り効果的に訴えるために、散漫な印象を与えかねないリスクを負いながらも、全体的な構成に関して最大限の配慮がなされていることがわかる。これは単に8つの項目を列挙しただけの、それまでの *Hunting Sketches* や *Travelling Sketches* とは大きく異なるものである。

結論の章に相当する第8章では、全体にわたり Trollope が最も懸念する「仕事量と収入の不均衡」の問題について述べられおり、年収1,000ポンドの教区牧師と、彼から年に70ポンドしか与えられず、教区の仕事の4分の3以上を代行させられる副牧師の例が紹介されている (97)。そして、収入が増える見込みが全くないことや、以前よりも社会的地位が低下してしまったことがこの悲惨な状況にさらに拍車をかけていると Trollope は指摘する。また強

調すべき点として、この章においてのみ全体の3分の1ものスペースを使って、当時の典型的な副牧師の生涯 大学を出て24歳で意気揚々と聖職に就いてから、現実に翻弄されて希望を失い、周囲の貧しい人々でさえ敬意を示さなくなるほどの貧乏人にまで落ちぶれる様子 が実に簡潔ではあるが、小説の登場人物に発展するかもしれないという期待を抱かせるように描かれている。これにより Trollope は、副牧師が置かれている状況の苛酷さをより鮮明に読者に想像してもらおうと考えたのだろう。

さらに、副牧師に関する記述はこの章のみならず他の章でも見ることができる。第2章では、財産の一部として所有する聖職授与権 (patronage) を行使して、主教が自分の友人にばかり聖職ポストを与え、懸命に働いてきた副牧師にはその対価として主教に要求する権利すらないことが伝えられる (28-29)。また第5章では、教区の仕事に精を出せば必ず充実感が得られる教区牧師と比較して、副牧師は次のように書かれている。

The curate, who is always a curate, to whom it is never given to exercise by his own right the highest clerical authority in his parish, cannot be said to have fulfilled the mission of his profession satisfactorily, let him have worked ever so nobly. (57)

教区牧師と副牧師の間に横たわる深く大きな溝は収入面だけでなく、務めを果たすことによって得られる充足感も大きく関係していることがわかる。副牧師の仕事量が教区牧師のそれをはるかに上回ることを考え合わせると、副牧師の肉体的かつ精神的負担は我々の想像を大きく超えるものであったろう。

最後に、英国国教会全体の中での副牧師の処遇がいかに不当なものを客観的な数値で示そうとするかのように、Trollope はほぼすべての章において各聖職位の収入に言及している。それによると、8,000ポンドの大主教を筆頭に主教は5,000ポンド、そして聖堂参事会長とは対照的に「すべきことは多いが手にするのは非常に少ない」(42) 大執事 (archdeacon) に関しては具体的な言及こそないが、一般的に「裕福」(44)であることがしっかりと書かれており、一方の聖堂参事会長は「数千ポンド(“modest thousand”)」(34)で、上の記述から大執事よりも多いことが推測できる。そして前述の通り、地方の教区牧師は1,000ポンドで、都市部の牧師も成功すれば1,000ポンドも夢ではない

が、ほとんどの者が200ポンドで苦しい生活を強いられる。そして最後に、副牧師はわずか70ポンドであることが伝えられる。一箇所にまとめて表記されているわけではないため見過されやすいが、これにより収入の格差は一目瞭然である。

2. 追加された第9章：“The Irish Beneficed Clergyman”

Trollope は1841年から約18年間、郵政監察官補佐 (surveyor's clerk) としてアイルランドに移り住み、仕事で国中を隅々まで回った。アイルランドの聖職者が置かれている厳しい状況を詳しく述べたこの第9章には、間違いなくその時の知識が活かされている。

この章で彼は、アイルランド国内で圧倒的に少数派である英国国教会の聖職者、中でも副牧師が抱えるジレンマに焦点を当てる。収入に関しては、第8章で登場したイギリスの副牧師よりも多い250ポンドという数字が提示されており(114)、一見すると恵まれた状況のようにも思えるが、イギリスの副牧師からは想像もつかないような精神面での負担が重く彼らにのしかかっている。

There is nothing more melancholy to a man's heart, nothing more depressing to his feelings, than a doubt whether or no he truly earns the bread which he eats. [...] He tells himself that it is the fault of the people, - that it comes of their darkness; that he is there if they will only come to him. But they do not come; and he has on his spirit the terrible weight of wages received without adequate work performed. It is a killing weight. (116)

務めを果たそうにも周囲に信者がいないという状況は、自らの存在意義の根幹に関わる深刻な問題となりかねず、彼らが抱えるジレンマは相当なものだったはずである。従って、第8章での70ポンドという額と今回の250ポンドを数字の上で単純に比較して、どちらが恵まれた状況にあるのかを判断することは無意味に等しい。つまり、この追加された第9章は前述の第1章から第7章までのように、仕事量にまったく見合わないイギリスの副牧師の不当な待遇の改善を強調するためのものとは一線を画しているのである。イギリス

とアイルランドの副牧師が抱える問題を比較の対象とするのではなく並列させることにより、この問題が一筋縄では解決できない非常に根深い構造的な問題であることを、彼は示そうとしているのだ。

そしてそんな彼らにさらに追い討ちをかけるように、いつも巢の中において決して働こうとしない「雄バチ (“drone”）」(117) に例えて、新聞は毎日のように彼らを批判する。このように二重にも三重にも苦しめられている彼らの姿は、“I never understood the situation until I read this essay of Trollope's.”⁸と Super も語るように、当時のイギリス人読者でさえ簡単に知りえない情報であったはずで、新聞に掲載された意義は十分にあったと言える。

それでは、Trollope がこの章を追加した根本的な動機は何だったのであろうか。残された手紙や自伝などには一切語られていないため断言することはできないが、アイルランドに精通しているという彼の自負とアイルランドの人々への深い愛情が関係しているものと思われる。例えば、旅行記の *North America* (1862) の中には次のような記述がある。

It has been my fate to have so close an intimacy with Ireland, that when I meet an Irishman abroad, I always recognize in him more of a kinsman than I do in an Englishman.⁹

また、アイルランドの大飢饉を背景とした *Castle Richmond* (1860) の冒頭で、その国を舞台とする作品がイギリス国内で不人気なことへの不満を口にした直後、“For myself, I may say that if I ought to know anything about any place, I ought to know something about Ireland”¹⁰ と語り手は述べている。つまり、自分がよく知る愛すべきアイルランドの現状をイギリス人読者に少しでも知ってもらいたいという欲求は、彼にとって極めて自然なものなのである。そして、英国国教会の副牧師の抱える問題がイギリスのみならずアイルランドにも存在することを伝える絶好の機会だと、彼はこの第9章を捉えたのだらう。

3. 追加された第10章：

“The Clergyman Who Subscribes for Colenso”

タイトルに登場する南アフリカのナタール (Natal) の主教 John William

Colenso に関して、この記事が書かれたであろう1865年の終わりから翌年始めにかけての彼を取り巻く状況をまずは簡単に振り返ってみたい。1853年にナタールの主教となった Colenso は、著書 *The Pentateuch and Book of Joshua Critically Examined* (1862-63) においてモーセ五書の信憑性に疑問を呈し、1863年11月に開かれた宗教会議 (synod) で異端を理由に主教の職を罷免された。その判断を不服とした Colenso は、「不当な扱いを受けた帝国の一市民」として枢密院司法委員会に控訴し、¹¹ 処分無効の決定を1865年3月に勝ち取った。しかし、その委員会ではあくまでも彼の仕事と俸給に対する権利が有効なものか否かが問われただけで、神学上の問題が議論された訳ではなかった。その後、同年11月に彼は南アフリカに数年ぶりに足を踏み入れ、集まった民衆に向けて熱狂的なスピーチを行う。これに対し、当初から Colenso 追放の先頭に立ってきたケープタウン (Cape Town) の Gray 主教の手による Colenso の破門宣告が、この第10章の追加を Trollope が申し出たわずか3日後の1866年1月5日に、ナタールの州都ピーターマリッツバーグ (Pietermaritzburg) の大聖堂で代読された。結局 Colenso は主教職を解かれたが、最後まで多くの支援者に支えられた。

他の章とは異なり極めて時事的な話題が取り上げられているこの章において、Trollope は科学を重視し教義に対して寛大な態度をとる広教会派 (Broad Church) の聖職者に着目し、なかなか窺い知ることのできない彼の内面や立場を知るためには、Colenso の訴訟費用を支援する寄付者リストへの名前の有無が決定的な判断材料になることを指摘している。第10章は全体的に努めて冷静かつ客観的に書かれているため、広教会派の聖職者に対する Trollope 自身の見方を判断することは容易ではない。Jill Felicity Durey は、Colenso とその教えに影響を受けた人々に対する Trollope の態度は「固定していない」と述べた上で、“Trollope’s article, while seemingly defending the right of Colenso and the new breed of clergyman to question biblical exegesis, strongly puts the opposing case by voicing the concerns of antediluvian rectors and pietistic vicars”¹²と、敵対する聖職者たちによる批判的な言動が本文中にあることを指摘して、Trollope が広教会派の聖職者に対して否定的な立場にあったことを示唆する。しかし、Trollope は当時の状況を客観的に描写したに過ぎず、ここから彼の立場を推測することはできないだろう。また *Oxford Reader’s*

Companion to Trollope において、Anne K. Lyons はこの第10章を次のように簡潔に要約する。

The Clergyman Who Subscribes for Colenso, often known as ‘broad-church’ or ‘free-thinker’, is not an admirable man. He is usually an urban clergyman, and often glib as well; this sort of man should not be supported; he is an infidel at best.¹³

確かにこの要約は本文中の言葉を随所に引用して書かれているが、Trollope も述べているように、これはあくまでも広教会派と対立する聖職者側からの視点にすぎず、要約として正確とは言えない。例えば、広教会派の聖職者は「口がうまい」と書かれているが、本文中では、聖書の記述を完全に受け入れて自分で考えることをしない年老いた牧師は、信じているものは何かと尋ねられてもすぐさま答えるが、“the new parson has by no means so glib an answer ready to such a question.”(126) と、前述の要約内容とは相矛盾する事実が述べられている。

Richard Mullen が、“Throughout his life he was a devout but moderate High Churchman with a liberal attitude towards doctrine and scripture.”¹⁴と語るように、Trollope は元来、高教会派の中でもリベラルな考え方の持ち主で、広教会派に対する拒否反応というよりもむしろ彼らの思想の良質な部分は積極的に取り入れていこうとしていた。さらに、Trollope も Colenso への寄付を実際におこなっており、彼を英雄視していた。¹⁵ また、彼ら広教会派が攻撃の対象としている、聖書の言葉を字義通り正しいものと受け止める「聖書直解主義 (“biblical literalism”）」に関して、N. John Hall が “In ‘The Clergyman who Subscribes for Colenso’ Trollope shows himself mildly forward-thinking in the doctrinal crisis affecting practically all Christians of his day.”¹⁶ と述べているように、彼らの批判に対して必ずしも否定的ではない。これらのことから、彼が「Colenso に寄付をする聖職者」を「支持するべきでない」と考えていたとはとうてい思えない。

冷静に書き進められていた第10章の中で、Trollope の感情の高まりを最後の段落にわずかながら見ることができる。少し長くなるが、その後半部分を引用したい。

He had, by the subscription, attached himself to the Broad Church with the newest broad principles, and must expect henceforth to be regarded as little better than an infidel, - certainly as an enemy in the camp, - by the majority of his brethren of the day. "Why does he not give up his tithes? Why does he stick to his temporalities?" says the old-fashioned, wrathful parson of the neighbouring parish; and the sneer, which is repeated from day to day and from month to month, is not slow to reach the new man's ear. It is an accusation hard to be borne; but it has to be borne, - among other things, - by the clergyman who subscribes for Colenso. (130)

ここに描かれている人物は、英国国教会の聖職者として大きな選択を迫られ、悩み苦しんだ挙句に実名でのColensoへの寄付を決断するのだが、その瞬間から退路は完全に断たれ、自分に非がないにもかかわらず、周囲からの厳しい批判に一方的に晒されることとなる。しかし、そんな人物に向けられるTrollopeの眼差しは温かく同情的である。そして大変興味深いことに、この直後に執筆が開始された*The Last Chronicle of Barset* (1867)の主人公である副牧師 Josiah Crawley にも、その聖職者とはほぼ同じ運命を見ることができるといえる。

イギリス南部の架空の州バーセットシャー (Barsetshire) を舞台とした人気の連作小説の最後を飾るこの作品は、彼が *Clergymen of the Church of England* の第9章と第10章の追加を手紙で申し出てからわずか19日後の1866年1月21日から執筆が開始された。主人公のCrawleyは*Barchester Towers* (1857)において、名前ではなく“a poor curate of a small Cornish parish”¹⁷としてわずかながら初めて登場し、*Framley Parsonage*では極貧の生活を余儀なくされる副牧師として大きな存在感を示した。そしてこの*The Last Chronicle of Barset*では、20ポンドの小切手を盗んだ疑いをかけられる主人公の副牧師として再び登場する。

物語が開始される前から彼が小切手を盗んだという噂はすでに広まっており、第1章からその噂が真実なのかどうか人々の最大の関心事となっている。その後、焦点はその小切手の入手先へと移るが、どんなに記憶をたぐり寄せてもCrawleyは正確な事実を思い出すことができない。別の教区の牧師であるMark Robertsが“I believe that he is mad”¹⁸と語るように、Crawley自身も含め多くの人々が彼の記憶喪失の原因を「精神の錯乱」と考える。

最終的にその小切手は、聖堂参事会長でかつての友人のFrancis ArabinがCrawleyに手渡したお金入りの封筒の中に、彼の妻が善意でそっとすべり込ませていたものであることが判明し、彼の無実が証明されるのだが、そのことが明らかになるまで彼には多くの非難の目が向けられた。中でも特に目立っていたのが、Proudie主教の妻によるものであった。彼女は判決が出るまで様子を見ようと説得する夫に構わず、日曜日になるたびにCrawleyの教会に聖職者を送り込むなどの強硬手段に打って出る。そして裁判が始まる前から、“He is a disgrace to the diocese, and he must be got rid of. I feel sure of his guilt, and I hope he will be convicted. [...] But if he escape conviction, you must sequester the living because of the debts.”¹⁹と夫に詰め寄る。しかし、Crawleyを最も落胆させたものは他にあった。それは“Mr Crawley Seeks for Sympathy”と題された章において、家族以外で唯一信頼していた貧しい労働者の教区民たちが、彼を犯罪者と見なしていると彼らの口から直接聞かされた時であった。そして、この章は直後の印象的な場面で幕を閉じる。

‘And am I a thief?’ he said to himself, standing in the middle of the road, with his hands up to his forehead.²⁰

その後、Mrs Proudieの強引な発案により、裁判前にもかかわらず5人の聖職者を集めた聖職者委員会 (clerical commission) が組織され、そこでCrawleyの処遇が検討されることになる。そして直接話を聞くために出席を求める手紙が彼のもとに届けられ、それを受け取ったCrawleyは一人あてもなく外を歩き、降りしきる雨の中で思いを巡らせ、ひとつの決意を固める。それは主教 実際には彼の妻の望みどおり、副牧師の職を辞するというものであった。この直後、挿絵としても選ばれた印象的な場面が再び訪れる。²¹ 旧知の年老いたレンガ職人 Giles Hoggett が仕事を終えて帰る途中、雨を全く気にすることなく一人で思い悩むCrawleyの姿を見つけて声をかけるのである。ふたりはともに雨に濡れながら、握手した手をそのまま離すことなく言葉を交わす。ほんの短い時間ではあったがHoggettはCrawleyの苦悩をすぐさま察し、彼の気分を和らげようとする。そして、別れ際に“‘It’s dogged as does it. It’s not thinking about it.’”²²と言葉をかける。Crawleyは心の中でこの言葉を何度も繰り返しながら家に帰り、そこに込められた意味を考える。そして、次

のように理解する。

[...] and [Crawley] discovered that the brickmaker's doggedness simply meant self-abnegation - that a man should force himself to endure anything that might be sent upon him, not only without outward grumbling, but also without grumbling inwardly.²³

Crawley は先ほどの短い会話の中で、Hoggett に対し“A man is killed all over when he is struck in pride”²⁴と洩らしていた。つまり、老人のこの言葉は彼の「自尊心」に対して向けられたものであり、周囲からの非難を耐え抜くにはその「自尊心」を犠牲にしなくてはならないという意味が込められていた。*Framley Parsonage* に登場した時から Crawley の「誤った自尊心」²⁵ は、苦しい生活を強いられているにもかかわらず誰からの援助も拒否するなど、彼自身のみならず家族にも大きな影響を及ぼしていた。そして、*The Last Chronicle of Barset* においてもその性格の根本部分は変わることなく、裁判に備えて弁護士を雇うよう妻を含め多くの人々が再三助言しても彼は一向に耳を貸さなかった。そんな「誤った自尊心」に固執し続ける彼にとって、それを犠牲にしなければ乗り越えることのできない今回の周囲からの非難は、「Colenso に寄付をする聖職者」と同様に、実に耐えがたいものであったはずである。

1866年1月21日に執筆が開始された *The Last Chronicle of Barset* は、同年9月15日に書き上げられ、6日後の9月21日にタイトルが正式に決まったのだが、²⁶ 実は6月24日の George Smith 宛ての手紙の中で、Trollope はこの作品のタイトルとして“The Story of a Cheque for £ 20, and of the Mischief Which It Did”を提案していた。²⁷ 小説のタイトルとしてはあまりに冗長で相応しくないものに思えるが、ここから Trollope が「20ポンドの小切手もたらす災難」の部分の強調したいと考えていたことは明らかである。また *An Autobiography* (1883) の中でも、この小説の主要な要素のひとつとして“a charge made against a clergyman for stealing it”が挙げられている。²⁸

ここでもう一度、*Clergymen of the Church of England* の第10章で描かれた聖職者の姿を思い返してみたい。彼は英国国教会の聖職者として避けることのできない重要な選択を迫られ、散々悩みぬいた末に Colenso の訴訟費用を支援するため5ポンドの寄付を実名で行う。しかし、その瞬間から彼は考え

方の異なる多くの聖職者から「異端者」扱いされ、何も悪いことをしていないにもかかわらず、容赦のない批判の言葉を投げつけられる。そして、そんな彼にできることはただ堪えることだけであった。これはまさしく、「5ポンドの寄付もたらす災難」以外の何もものでもないだろう。最後に、Trollope はこの第10章を含む2つの章の追加を申し出た手紙の中で、“Would [you] like next year to bring a novel [...]?”²⁹ とこの小説に関する初めての提案を George Smith にしていた。これはつまり、彼の頭の中に両者のアイデアがほぼ同時期に存在していたことを物語っている。

結

Clergymen of the Church of England には当然のことながら数多くの聖職者が登場するが、同じく聖職者が大きな役割を果たすパーセツトチャーを舞台とする Trollope の代表的な連作小説とはジャンルが異なっていることもあり、この作品は当時の読者の関心はおろか、現在に至るまでほぼ研究の対象とすらされてこなかった。しかしここまでで明らかのように、この作品は途中で2つの章が付け加えられたことによって不明瞭になってしまったが、第8章での Trollope の主張を前の7つの章が御膳立てするという、8つの項目をただ羅列しただけのそれ以前の *Hunting Sketches* や *Travelling Sketches* とは大きく異なる、十分に考え抜かれた作品構成となっている。当初はその2作に倣って *Clerical Sketches* というタイトルが考えられていたが、³⁰ *Clergymen of the Church of England* と変更することにより、「英国国教会という巨大組織の中の副牧師」という位置づけがさらに明確になったこともここであわせて強調しておきたい。

追加された2つの章のうちの第9章は、第1章から第7章までとは役割が異なり、アイルランドにおける副牧師のイギリスとはまた違った過酷な精神状態を描くことで読者の視野を広げ、副牧師の抱える問題がいかに構造的かつ深刻なものを伝える役目を担っている。そして第10章は、Trollope の代表作のひとつでもある *The Last Chronicle of Barset* の着想の源であることを十分示唆する内容であった。

なぜ彼が当初の構想を変更してまで2つの章を追加したのか、その真相は

間の中だが、この *The Last Chronicle of Barset* との連関がひとつの大きな要因となったのではないだろうか。もし彼がこの小説を書く上でその第10章が大きなヒントになったのだとすれば、小説家 Trollope にとってそのアイディアの源泉は簡単に葬り去ることのできない大きな価値を持つはずである。そしてさらに、*Clergymen of the Church of England* が小説ではなくエッセイであったことが、2つの章の追加の決断を最終的に後押ししたと思われる。もしこれが小説であれば、今回のような選択を決して彼はしなかったはずである。以上のように、*Clergymen of the Church of England* は Trollope の様々な想いや葛藤が交錯した作品であったが、従来のような単なる連載記事の寄せ集めとして片づけられないものであることは、今や否定できない事実であろう。

注

本稿は、平成20-23年度科学研究費補助金（若手研究B）「ヴィクトリア朝の出版形態がトロロプの小説に与えた影響について」（課題番号：20720081）による研究成果の一部である。

1. R.H.Super, *The Chronicler of Barsestshire: A Life of Anthony Trollope* (Ann Arbor: The University of Michigan Press, 1990), p.199.
2. Hugh Walpole, *Anthony Trollope* (Freeport: Books for Libraries Press, 1971), p.156.
3. N. John Hall (ed.), *The Letters of Anthony Trollope* (Stanford: Stanford University Press, 1983), vol.1, p.325.
4. 別表を参照。
5. Anthony Trollope, *Framley Parsonage* (Oxford: Oxford University Press, 1980), p.170.
6. Anthony Trollope, *Clergymen of the Church of England* (Leicester: Leicester University Press, 1974), p.74. 以後、この版からの本文中の引用は括弧内にページ番号のみを記す。
7. R.H.Super, “Introduction” to *Clergymen of the Church of England*. By Anthony Trollope (Leicester: Leicester University Press, 1974), p.xxxii.
8. *Ibid.*, p.xxxiv.
9. Anthony Trollope, *North America* (Gloucester: Alan Sutton, 1987), vol.2, p.463.
10. Anthony Trollope, *Castle Richmond* (Oxford: Oxford University Press, 1991), p.1.
11. Owen Chadwick, *The Victorian Church: Part II 1860-1901* (London: SCM Press Ltd, 1987), p.93.
12. Jill Felicity Durey, *Trollope and the Church of England* (New York: Palgrave Macmillan, 2002), p.29.
13. R.C.Terry (ed.), *Oxford Reader's Companion to Trollope* (Oxford: Oxford University Press, 1999), p.108.

14. Richard Mullen with James Munson, *The Penguin Companion to Trollope* (London: Penguin Books, 1996), p.78.
15. 例えば、Richard Mullen, *Anthony Trollope: A Victorian in His World* (Savannah: Frederic C.Beil, 1992), p.253; *The Penguin Companion to Trollope*, p.95; *The Letters of Anthony Trollope*, vol.2, p.736. を参照。
16. N.John Hall, *Trollope: A Biography* (Oxford: Clarendon Press, 1991), p.294.
17. Anthony Trollope, *Barchester Towers* (Oxford: Oxford University Press, 1980), vol.1, p.190.
18. Anthony Trollope, *The Last Chronicle of Barset* (London: Penguin Books, 2002), p.46.
19. *Ibid.*, p.47.
20. *Ibid.*, p.122.
21. 例えば、George Newlin (ed.), *Everyone and Everything in Trollope* (Armonk, New York: M.E.Sharpe, 2005), vol.1, p.343. を参照。
22. *The Last Chronicle of Barset*, p.646.
23. *Ibid.*, p.646.
24. *Ibid.*, p.646.
25. 例えば *Framley Parsonage* において、Mark Roberts の妹 Lucy は “How false is his pride, and how false his shame!”(265) と Crawley を非難している。
26. *The Letters of Anthony Trollope*, vol.1, p.353.
27. *Ibid.*, vol.1, p.342. なお現在のタイトルへの変更の理由として、George Smith からの要請があったのではないかと N.John Hall は推測している (353)。
28. Anthony Trollope, *An Autobiography* (Oxford: Oxford University Press, 1992), p. 274.
29. *The Letters of Anthony Trollope*, vol.1, p.325.
30. 例えば、*The Penguin Companion to Trollope*, p.92. を参照。

〔別表〕 *Clergymen of the Church of England* の目次

1. The Modern English Archbishop
2. English Bishop, Old and New
3. The Normal Dean of the Present Day
4. The Archdeacon
5. The Parson of the Parish
6. The Town Incumbent
7. The College Fellow Who Has Taken Orders
8. The Curate in a Populous Parish
9. The Irish Beneficed Clergyman
10. The Clergyman Who Subscribes for Colenso

論文

ヴィクトリア朝期イギリスにおける自治体公園の誕生

バーケンヘッド・パークの成立を通して

芝 奈 穂

はじめに

本稿は、1847年に、イギリスにおいて自治体が設立する最初の公園として開園したリバプール近郊のバーケンヘッド・パーク (Birkenhead Park) 成立の過程を明らかにしながら、イギリスにおいて19世紀中期に発達した公園制度とはいかなるものであったかを都市史 (urban history) の観点から考察するものである。ヴィクトリア朝都市の諸要素のうち、道路整備や住宅開発、駅やタウンホール等の公共建築物の開発については、それぞれいくつかの研究があるが、公園については、従来、その関心度は低かった。

バーケンヘッド・パークについては、これまでもいくつかのすぐれた研究があるが、それらはこの公園のデザインに関するものが多いように思われる。例えば、イギリスにおける公園研究の先駆的立場をなすチャドウィックの研究においては、バーケンヘッド・パークは郊外ランドスケープであるとし、公園内部のデザインを分析している。¹ 彼の研究を受けて、バーケンヘッド・パークをロマンティック・サバーク (romantic suburb) の系譜において論じた研究があるが、それらもデザイン分析にとどまっている。² また、ヴィクトリア朝公園の概論を記したコンウェイの研究は、19世紀イギリスにおける公園の発達を社会とデザインの関係から概観しているが、バーケンヘッド・パークについての記述は限られている。³ さらに、本公園がニューヨークのセントラル・パークを設計した高名なオルムステッド (Frederick Law Olmsted) のデザイン思想に与えた影響について論ずる研究も多いが、ここでもデザインに特化されている傾きがある。⁴

これら先行研究の視座に立つとき、いかなる理由でそれらのデザインが採

用されたのか、それらのデザインにどのような意味がこめられていたのかといった点に興味を引かれる。本稿はこれらの点を手がかりとして、都市史の枠組みで公園をとらえ、最初の自治体公園として設置されたバーケンヘッド・パークの成立理由とその過程を概観することを主眼とする。具体的には、最初に、本公園が自治体公園として設立されるに至った動機を考察する。次いで、中産階級のための郊外建設と連動した公園づくりという観点から本公園を分析し、それらの事項が、ジョゼフ・パクストン (Joseph Paxton 1803-1865) による公園デザインにどのように表徴されていたのかを追究する。パクストンはヴィクトリア朝の進歩および技術発展の時代を体現する人物であり、庭師、植物学者、庭園デザイナーとしての地位を確立した。バーケンヘッド・パークをはじめ、いくつかの公園デザインを手がけ、後に1851年ロンドン万国博覧会の会場であるクリスタルパレスを設計した建築家としても名を馳せた。⁵ 最後に、本公園が公共性という点において、いかに地域の環境と福利を守っていったかについても考察することにしたい。

バーケンヘッド・パーク建設に至る状況については、地方自治体文書である「改良委員会議事録」(以下、「議事録」という。なお、当該委員会は、1845年1月以降、「道路および改良委員会」と名称変更したが、両者とも「改良委員会」として扱う。)を用いて分析する。⁶ 自治体文書は、公園研究全般において、これまでほとんど用いられることがなかったが、公園設計に至る状況、その財源の確保から設計家の選定、建設状況、開設後の条例制定に至るまでが記された重要な一次史料である。また、公園設計図も、従来の研究においては、挿絵程度に扱われていたにすぎないが、公園の全体像を把握する上での貴重な一次史料となりうる。「議事録」とパクストンによる設計図の比較検討は、本稿が用いた主要アプローチの一つである。

1. 19世紀における自治体設置の公園

公園 (public parks) とは、その名が示すとおり、すべての階級に開かれ、だれでも無料利用できる公共空間である。⁷ それは19世紀の産物であり、イギリスを先駆けとしてヴィクトリア朝社会に誕生した。公園の出現は、産業革命以降における都市化の問題と密接に関わる。都市人口の急増と環境悪化に対

処するために建設されたからで、とりわけ、非衛生的な工場と狭い通りに雑居する家々に閉じ込められた労働者の健康状態は深刻であった。このような状況下、1832年に発生したコレラの大流行は、都市部における環境整備と衛生改革を推進する契機となった。

翌1833年、国の特別調査委員会である「公共遊歩道委員会」(The Select Committee on Public Walks) が設置され、各都市における公共オープンスペースの現状調査にあたった。当該委員会が、同年、議会に提出した「調査報告書」(以下、「報告書」という。)は、ロンドンをはじめ、マンチェスター、リバプール等の大都市において、労働者の流入と不動産の高騰がオープンスペースを欠如させたことを明らかにしている。⁸ その上で、「報告書」は、労働者の健康維持のために、「新鮮な空気」(fresh air)のもとで運動できる場所を確保すべきこと、さらに「酒場での飲酒や、闘犬の試合およびボクシングの試合」見物など、低級な娯楽に興じる労働者のモラルを向上させるため、オープンスペースを提供し、洗練された娯楽としてのレクリエーションを促進すべきことをつとに強調している。⁹

「報告書」でも述べるように、ロンドンにはいくつかのオープンスペースがあったが、それらは、「一般大衆が無料で利用できる公共空間」という定義からは外れるものであった。例えば、ロンドンの広場、「スクエア」は都会における緑の空間となっていたが、常時、鍵がかけられており、「スクエア」に面した屋敷の住人しか利用できなかった。¹⁰ また、動物園や植物園なども、人々が集う緑地という意味では公園に似た役割を果たしたが、入場料や学会費を払わなければ入れず、全ての階級に開かれた空間とは言い難かった。

さらに、ロンドンの王立公園(Royal parks)は現在、もっともよく知られた公園であるが、それも19世紀においては、完全に無制限の利用を謳っていたわけではなかった。リージェント・パーク(Regent's Park)は19世紀初頭、建築家ジョン・ナッシュ(John Nash)のデザインにより造られたが、当初は公園建設の資金回収も兼ねて、公園のまわりの富裕層向け住宅開発が公園造成とセットになっていた。¹¹ したがって、リージェント・パークは、初めから公園の全部が一般大衆に開かれていたわけではなく、徐々に門戸を開放していったのである。

「報告書」が出された後、階級に拘らずに全ての大衆が利用できる「公園」

を建設しようとする試みがいくつかなされた。が、全体としてその進捗は非常に遅いものであった。1840年、ダービー植物園(Derby Arboretum)と呼ばれる小公園が造られた。同植物園は、ダービーの実業家であるジョゼフ・ストラット(Joseph Strutt)の寄付によって造られたものである。ストラットは減少するオープンスペースを補うため、また、酒場やパブに代わる娯楽提供のため、さらには、労働者階級のモラル向上のために、11エーカーの土地を寄付し、公園として大衆に開放した。彼の動機には、「報告書」の影響を見て取ることができる。しかし、この公園は、すべての階級に開かれていたとはいえ、財政上の理由から、水曜日と日曜日以外は入場料が必要であった。¹² このように、ヴィクトリア朝初期においては、「公園」とは、その名が示すようには必ずしも公共空間とは言えなかったのである。

19世紀半ば、新たに登場したのが、自治体(local authority)設置の公園(municipal park)である。これは、王立公園や寄付による公園と違って、自治体に完全な所有権があり、それゆえ、一般の人々は無制限にアクセスできた。¹³ その最初となったのが、1847年、リバプールの隣町に建設されたバーケンヘッド・パークだったのである。当該地の自治体が公園建設に取り組んだ直接的なきっかけは、マージー川を挟んでバーケンヘッドの対岸に位置するリバプール市の過密状態にあった。リバプールは造船、製粉などの工業で発達し、1841年にはすでに人口22万を超える大都市であった。当時、バーケンヘッドはいまだ田園的な情緒を残すとはいえ、リバプール近郊の新興都市として急激な人口増加に見舞われていた。1831年の人口が2,569人。1841年は3倍の8,223人。公園が完成した1846年には、4万人にまで膨れ上がった。¹⁴ このため、将来、リバプールと同じような過密非衛生状態に陥らないように、あらかじめ自治体公園を造り、当該公園を中心にコントロールされた都市を創ることが、自治体の企図したものであった。¹⁵

2. 中産階級のための郊外として出発したバーケンヘッド・パーク

1842年、バーケンヘッドの自治体は公園建設を正式に決定し、公園用地獲得のため、バーケンヘッド改良条例(The Birkenhead Improvement Act)制定の承認を議会に求めた。翌年、当該都市改良条例は議会で承認され、自治体はす

くに公園用地買収に着手した。新たに「改良委員会」が設置され、鉄道建設業者兼実業家のウィリアム・ジャクソン(William Jackson)、造船業者マクレガー・レアド(MacGregor Laird)、さらに、国内屈指の鉄道建設業者トマス・ブラッシー(Thomas Brassey)等が用地買収にあたった。¹⁶ この事業に際しての最大の難関は、いかに財源を確保するかに尽きた。というのも、当時、公園建設の財源に地方税を充てることは認められなかったからで、¹⁷ 従って、寄付等の施しに拠るか、私的な事業に拠るかの二者択一しかなかった。¹⁸ パーケンヘッド・パークの場合、後者が選択された。私的事業による土地開発を経る手立てである。すなわち、公園の縁に住宅地を開発し、公園とセットにすることによって近隣の地価を上げ、さらに、当該住宅地売却による利益を公園建設費に充てることで、一石二鳥を狙った。リージェント・パークの手法を取り入れたものである。¹⁹ 彼らは全体で91ヘクタールの土地を購入し、そのうち51ヘクタールを公園用地とし、残りを住宅地として個々の宅地売却に充てることに決定した。

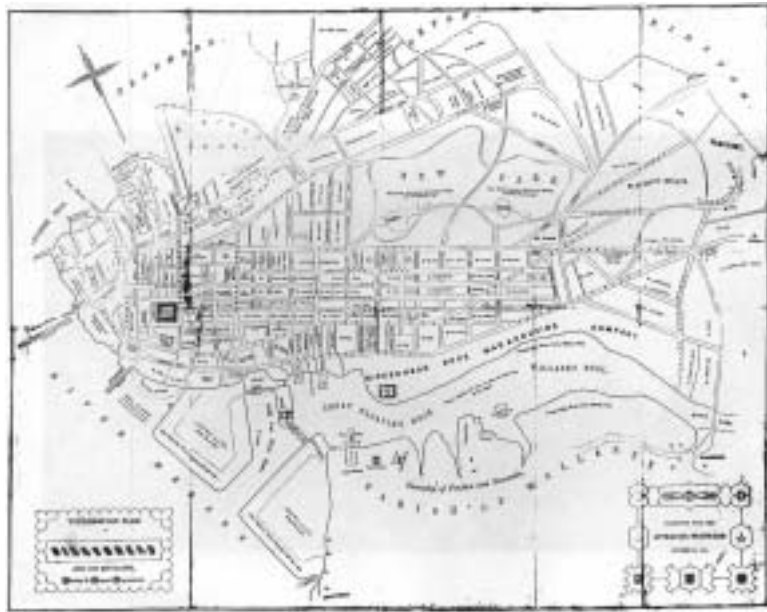


図1: Birkenhead in 1844
Carol E. Bidston, *Birkenhead ... of Yesteryear* (Wirral: Metropolitan Borough of Wirral, 1985)

これらの状況に鑑みるに、公園建設は当時、地元名士の代表からなる地方自治体による上から下への動き(top-down development)であったことが窺える。このことは、本公園が、裕福な商人や実業家たちの住む中産階級地域に配置されたことで示されている。1844年10月22日付け『リバプール・スタンダード』に載った当時のパーケンヘッド市街地図 図1²⁰では、建設途上の公園は、格子状の住宅地によって囲まれた中心地に位置していることがわかる。これらの住宅地の大半は、ジャクソンやレアド、プライス等自治体メンバーやリバプールに仕事を持つ裕福な商人たちによって占められたのであり、新しい公園を中心とするパーケンヘッドが中産階級の風情を醸したのであることが想像される。

住宅地開発という試みについては、当該公園の設計者パクストンにも当初からの確に指示されていた。パクストンは第6代デヴォンシャー公爵(Duke of Devonshire)邸チャッツワース(Chatsworth)におけるお抱え庭師として活躍しながら、植物学者および庭園デザイナーとしても頭角を現していた。1843年7月、第一回の「改良委員会」が開かれた際、パクストンに公園設計を委嘱することが決定された。²¹ 彼が作成したパーケンヘッド・パークに関わる設計図 図2。以下、「設計図」という。では、おおよそ六角形をした敷地



図2: Paxton's Plan for Birkenhead Park

Liverpool Record Office, Liverpool

(91ヘクタール)の中央部に、カリフラワー形の公園(51ヘクタール)を配し、そのほぼ中央を南北に走るアッシュヴィル・ロード(Ashville Road)によって、東半分の上公園(upper park)と西半分の下公園(lower park)に分割している。このカリフラワーの外側にあたる公園周縁部には、規則正しく売却用宅地32区画を並べ、さらに、設計図の右下に各区画の値段を明記している。また、「議事録」においても、売却用地が重要事項として取り扱われている。1844年9月の「議事録」には、「住宅地開発のためのプランを決定する目的」でパクストンが招聘されたこと、1週間をおかずして、彼が「売却用地を32区画に分けた公園プラン」を作成し、「改良委員会」に提出したことが記されている。²²

批評家間ではこれまで、「設計図」製作日時について、意見が分かれていた。クリース、パーミンガムおよびレガート等は、公園建設の議論が始まった1843年としており、パークランズコンソーシアムおよびソートン等は1844年、コンウェイが1845年としている。²³ しかしながら、前述したことから、「設計図」は、1844年9月、「改良委員会」が売却用宅地プランを作成するようパクストンに依頼したときに描かれたものと推察できる。住宅地開発が、このプロジェクトの最も大きな要素であったのである。

パクストンのプランに基づいて、宅地売却プランが作成され、1845年に売り出された。しかし、自治体の期待はずれ、売れ行きは芳しくなかった。そのため、売却プランはその後何度も修正された。にも拘わらず、結局、宅地売却は財政的に成功を収めた。というのも、売却用宅地価が公園の存在により高騰し、公園建設にかかる経費を補うことができたからである。²⁴ 住宅地開発からあがる収益によって建設費用をまかなうことと、近隣の地価をあげることという二つの目的はこのようにして実現した。これは、事業の財源獲得のためのきわめて現実的、かつ中産階級的な手法といえる。慈善的な事業とは言い難いが、実際のところ、この時代においては、自分たちの公園を創るための経費を捻出させるたった一つの方法であった。この宅地売却の方法は、その後、全国における自治体公園の発達の手本となり、さまざまな自治体で似たような方策がとられるようになった。

公園と宅地売却という組み合わせは、財源確保という面から優れた方策であっただけでなく、また、理想的な郊外開発という中産階級的価値観を体現

するものでもあった。実際、これまでも何人かの批評家たちが、パーケンヘッド・パークを公園と住宅地の組み合わせによる理想的な郊外開発の例として論じている。²⁵ 本公園の中央を南北に走るアッシュヴィル・ロード沿いには、商人や会社経営者等裕福な中産階級の住人が多く住んだことから、²⁶ 郊外開発の概念が社会的に達成されたことを思わせるのである。また、実際には実現しなかったものの、「改良委員会」は、公園のすぐそばに「赤石でできた美しいゴシック教会」を建設することを検討していた。²⁷ 教会は中産階級にとって必要不可欠なものであり、従って、このことから、本公園建設が理想的な環境を伴う郊外開発の一環であったことは明らかである。

中産階級的な価値観に彩られた郊外開発という理念は、「設計図」の中にも読み取ることができる。パクストンの設計は18世紀以降、貴族のカントリーハウスで流行した「風景庭園」(landscape garden)の伝統の上に立っている。チャドウィックは、本公園のデザインは、ハンフリー・レプトン(Humphry Repton)やナッシュ風のスタイルで設計されていると述べている。²⁸ 両者ともイギリスの「風景庭園」の基礎を築いた庭園デザイナーであるが、²⁹ 形式ばらないゆるやかな曲線を描く田園的風景の創出をその特徴としていた。パクストンはチャッツワースの庭師として、彼らの造園術にも精通していた。「設計図」においては、見晴らしのきく広々としたパークランド、その中に点在する木々や藪、くねくねと曲がる歩道、不規則な輪郭をもつ湖等、本公園のレイアウトは、「風景庭園」の伝統を踏まえている。

しかしながら、本公園設計においては、上流階級のカントリーハウスで展開される造園術を単にそのまま郊外に取り込んだというわけでもない。パクストンは、「自然と都市が調和した郊外の理念」とも言うべき新しいコンセプトのもとに、「風景庭園」の伝統を自分の設計の中に取り入れたと言える。パーミンガムは、パーケンヘッド・パークは、ロンドンのスクエアと同様、自然を都市環境に取り込むように設計されており、住人が都市にいながら自然と触れ合うことができるような、他から遮断された空間を有していると述べている。また、そのような計画設計によって誕生した郊外は、19世紀の中流階級に非常に人気があったとしている。³⁰ これは、メラーやテイラーなどの都市史家たちが、「都会の中に田舎を取り込む」(rus in urbe)と表現する19世紀イギリスで見られた自然を意識的に都市に取り込もうとする動きと連動

している。³¹

その背景にはもちろん、産業都市における急激な人口増加と悪化する環境、その対策として都市に自然を取り込まざるを得ない物理的な必要性などが挙げられよう。³² さらに、概念的なレベルにおいては、都市における緑、すなわち自然の存在自体が、ヨーロッパ文明の質を計る物差しとして考えられていたことも大きな要因と言える。19世紀は世界経済の発展、科学および技術の進化、ならびに世界資源の搾取といった複合的な要素により、自然に対する認識を変化させた。とりわけ、植物学への知識熱と園芸業の隆盛は、ヴィクトリア朝の人々の自然界に対する関心を如実に表すものである。いわゆるプラントハンターと呼ばれる人たちが、めずらしい外国種の植物を求めて世界へと旅立った。彼らの働きはこの時代に新しい自然観をもたらした。³³

自然に対する認識の変化は、都市の緑地に対する概念に対しても多大な影響を与えた。都市における緑地は、文明の証と考えられるようになり、公園を備えた理想的な郊外が中産階級を対象に作られるようになった。パーケンヘッドはそのような郊外開発の初期の例であった。従って、パーケンヘッド・パークは、表面的には18世紀以来の「風景庭園」の伝統を踏襲しているかに見えるが、実際は、都市の中に自然を取り込むことを深く意図した空間づくりとなっている。伝統的な造園術が、田舎の牧歌的イメージを紡ぎ出すべく、自然らしさ (naturalness) を演出するのに対し、パーケンヘッド・パークのような中産階級の郊外は、都市に自然を持ち込むことを文明の証として表現したのである。

これらのコンセプトは、パクストンのデザインの細部にまでも表現されている。パクストンがまず手がけたことは、大規模な排水工事であった。公園の敷地はもともと荒れ果てた沼地であったため、それを都市郊外の美しい自然景観に変換させるためには、排水工事を最優先しなければならなかった。しかも、「議事録」の記述から、公園排水工事が、町の下水システム構築と同時に進められたことが判る。³⁴ また、排水工事から本公園景観の最も重要な部分を占める湖が造成されている。³⁵ すなわち、湖の造成も公園の排水工事の一環であったが、それを単なる土木工事に終らせなかったのである。パクストンは、湖に優雅に入り組んだ入り江や岬を加えることによって、「より牧歌的で、ピクチャレスクな様相を付け加える」よう工夫した。³⁶ このように、

実用的ながら洗練されたデザインは、都市に自然を取り込もうとする明確な意図をもって、本公園の設計に取り入れられたのである。

同様なことは、公園のルートシステムのデザインにも見られる。これもまた公園周辺における町の道路建設と並行して進められた。³⁷ パクストンは、このルートシステムにおいて、歩道、巡回道路、および上公園と下公園を分割するアッシュヴィル・ロードによって、歩行と馬車、そして通り抜け交通の三者をうまく分離融合させた。³⁸ これにより、様々な公園ユーザーの用途に応えつつ、さらに、公園に自然で牧歌的な性格を添えるに至った。アメリカの公園設計家オルムステッドが、このパーケンヘッドでの循環システムに感銘を受け、セントラル・パークでの自身のデザインの中で、それに似たルートシステム、サンケン・ロード (sunken road) を作ったのは、しばしば指摘されることである。³⁹

公園内の建物も、公園全体の印象を損なわないような形とデザインで配置された。最も重要とされたのは、ロッジである。これは、貴族の大邸宅入り口に門衛のための住居として置かれたもので、この伝統は19世紀公園においても取り入れられ、入り口に設置されるのが普通であった。ロッジは、いわば公園の顔であり、パーケンヘッド・パークにおいてもパクストンの最初の



図3: 湖のボートハウス

The Illustrated London News, 10 April 1847

仕事は、全部で7つの入り口に立てられることになるロッジの設計であった。⁴⁰ それらのロッジは、それぞれ異なった形式で設計され、ノルマン形式、チューダー形式、ゴシック形式、イタリア風と異なった趣を見せた。公園内の湖に架かる橋も同じように中国風、スイス風、田舎風と異なる形式で設計された。⁴¹ 下公園のポートハウス 図3 は、ローマンスタイルで設計され、古典派の魅力を添えている。このように、公園内建物の設計において、多様な建築様式と、異国情緒あふれるイメージを取り込もうとする意図が見えるのである。

3. 中産階級のための郊外から一般大衆のための公共空間へ

本公園は、もともと中産階級的な価値観から生まれた。しかし、本公園が、階級に拘らず地域社会全体にその門戸を開いたことも、また事実である。公園が造られる直前の1843年に、パーケンヘッドの自治体が町の衛生状態について調査したレポートには、「地域社会の福祉のため、もっと完全に包括的な様々な事柄がなされれば、加えて、地域社会における秩序と都市の清潔さがより完全に保たれれば、社会の道徳的倫理観がより高まり、より健康的で幸せな状況が得られるであろう」とある。⁴² 文中、「地域社会の福祉」、「地域社会における秩序と都市の清潔さ」、さらに「社会の道徳的倫理観」といった表現には、公衆衛生と福祉を地域社会に徹底させようとする中産階級的意欲が顕著である。パーケンヘッドの地方自治体は、本公園の建設を通して、地域社会全体に良好な環境および健康的なレクリエーションの場を提供することを目的の一つとしていたのである。⁴³

また、地域社会の秩序を守り、道徳的倫理観を高めるためにも、パクストンおよび自治体は、公園内において一般大衆に洗練された振る舞いを促そうとした。1845年7月、パクストンは、「改良委員会」議長のジャクソンに手紙を書き、公園の「永久的な管理方法」について提言した。それは、常駐の管理人 (superintendent) を公園に置くことによって、「公園の全ての部分が年々、調和を保てるようにする」こと、および公園の「秩序を最大限に維持する」ことを提案している。⁴⁴ この手紙から、パクストンが、管理人に公園内の規律を徹底させる役割を期待していたことは明らかである。

彼の提案を受け、パクストンの弟子であり、公園建設を監督してきたエドワード・ケンプ (Edward Kemp) が公園管理人に任命された。パクストン自身は設計を委嘱された1843年夏から、最後に報酬を受け取る1846年頃まで、本公園の建設に関わったが、それ以降の管理および運営は、ケンプが取り仕切った。彼は1891年に死去するまで、公園内に建設されたロッジの一つに常駐しながら、管理人を務めた。⁴⁵ 彼の主な仕事は、芝刈りや、植物の支柱として鉄杭を注文すること等であったが、⁴⁶ 公園内で発生する無秩序な出来事への対処も求められた。たとえば、複数の若木が何者かによって切り倒され、持ち去られた時には、被害状況の調査を行い、公園における秩序の徹底にあたった。⁴⁷ さらに、ケンプは、警察とも連携して公園の管理にあたり、一般大衆の規律維持に携わった。常駐の管理人による公園管理という方法は、19世紀後半における公園運営の基本となったが、その原型を造ったのが、本公園の事例であった。

また、公園の形態そのものが、一般大衆に洗練された振る舞いを広めるのに適した形態であったともいえる。ヴィクトリア朝初期においては、中産階級の最も適当なレクリエーションは、散策 (promenading) と考えられていた。⁴⁸ 本公園の主たる用途は、そのデザインから明らかなように散策にあった。「改良委員会」のメンバーたちは、散策を奨励することが一般大衆をより優れた社会的行動に導くと考えていた。パクストンも自治体も、散策のためのスペースをより広く取ることを念頭においており、従って、公園内にスポーツ施設を含めることには消極的であった。その結果、「設計図」には、スポーツ施設は一つも組み込まれていない。「設計図」の大部分を占める牧草地のような緑の広大なオープンスペースは、全て散策のためであった。

しかし、スポーツはその後、徐々に公園内で認められるようになった。1846年5月、パーケンヘッド・クリケットクラブが「公園の平らな部分」をゲームのために使用したい旨、「改良委員会」に要請し、パクストンの判断に委ねられた後、「改良委員会」によって許可された。⁴⁹ アーチェリーは1850年に正式に認められ、⁵⁰ 輪投げ広場は1854年にクリケット・テントの後ろに設けられた。⁵¹ フットボールは1861年に許可された。⁵² 湖での水泳は禁止されていたが、スケートは認められた。⁵³ 1855年には釣りも決められた場所においてという条件の下、認められた。⁵⁴ このようにスポーツは地域住民主導

のもとに推進され、スポーツ施設は、パクストンのデザインに後付けで組み込まれていった。⁵⁵ 自治体およびパクストンは、散策という洗練されたレクリエーションのための場をも保持しながら、スポーツ施設やレクリエーションの場をも秩序ある環境の中に徐々に取り入れていったことになる。環境を守り、かつ地域の福利を図るこのような自治体活動の中に、地方自治の発展をみることができよう。⁵⁶

地方自治精神は、1847年4月5日の開園日にピークを迎えた。図4 公園は1846年に完成していたが、開園は、バーケンヘッド造船所と倉庫のオープニングと、チェスター・バーケンヘッド間鉄道ラインの造船所までの延長の日とを同時に祝うために延ばされていた。その日の行事は、バーケンヘッド造船所委員会や、自治体のメンバー、およびランカシャー・チェスター間鉄



図4: 公園開園日の様子
The Illustrated London News, 10 April 1847

道の幹部たちによって進められた。まず、造船所と倉庫が開かれ、その後、一行は開園のため公園へと向かった。式典が行われ、公園はすべての人に開かれた。式典の後、スポーツイベントが行われ、一般大衆は公園でクリケットやフットボール、「大袋かつぎレース、豚追いかけレース、柱登り、その他、

様々な珍しい憂さ晴らしのスポーツ」を楽しんだ。⁵⁷ 「改良委員会」による理想的な郊外を作るという宿願は、このような形で階級に拘わらず全ての住人が利用できるパブリックスペースの提供という実りのある結果に収斂した。

パブリックスペースという意味では、例えば、1851年のロンドン万国博覧会と比較できる。万国博覧会は最初の国際的な万博であり、世界各国から集められた豪華な商品や物品が陳列され、イギリスの科学的進歩と文明を世界に知らせた画期的な出来事であった。また、パクストンの設計による万国博覧会の会場となった水晶宮 (Crystal Palace) は、セント・ポール大聖堂の6倍という今までに類を見ない規模の建築物であった。莫大な量の鉄とガラスを使い、画期的なプレハブ (組み立て式) の造りであり、さらに、革新的なデザインの建築物であった。そのデザインの新しさとイギリス最初の催しという意味で、万国博覧会とバーケンヘッド・パークには共通点がある。

けれども、そのような物理的な側面だけでなく、むしろ、その中身の斬新さに意味があったのである。万国博覧会には、階級の壁を意識させない民主的な空間が窺えた。数多の労働者階級が訪れ、科学的発展の栄光を富裕層と共に祝った。その頃、発展を遂げていた鉄道に初めて乗って、万博は商業の場でありながら、学びの場であり、また娯楽の場であった。富裕層だけでなく労働者のためのスペースが都市に提供されたことになる。その意味で Crystal Palace は People's Palace と呼ばれた。Birkenhead Park が People's Park と呼ばれたことを考えると、両者とも、都市の人々に、娯楽および学びのためのスペースを提供したという意味でまさにパブリックスペースであった。さらに、そのようなスペースは、同時に文化、文明の力を表現し、国や自治体の精神といったものを体現するものでもあった。

両者の唯一の違いは、入場料の有無である。万博の方は入場料が課されたが、公園の方は無料であった。尤もパクストン自身は、この万博において、労働者階級が優先されるべきであると考えており、したがって、彼らの入場は無料にすべきであると説いた。実際は、この入場料無料の案は採用されず、入場料が徴収された。⁵⁸ パクストンは、民主的な理想を抱いていた人物であり、それをバーケンヘッドで培ったと考えてよいであろう。バーケンヘッド・パークは、一般大衆が何の制限もなしに自由に利用できる初の公園 (municipal park) となった。

前述したオルムステッドは、本公園を見学した際、公園の民主的なありようを描写している。パクストンが散歩用に配置した芝生のオープンスペースにはテントが張られ、男の子たちと紳士がそれぞれクリケットを行っている。また、遠くには羊が草を食べている牧草地があり、女の子と女性が楽しんでいる。牧歌的な空間の中で、散歩をしたりスポーツをしたりしながら、召使を連れただの中流階級と、一般大衆が混ざり合っているのを目の当たりにし、オルムステッドは「公園で楽しむ特権が全ての人々に平等に分け与えられている」ありさまを賞讃している。彼は、民主的と言われるアメリカでさえ、このような民主的な空間はないとして、本公園を「人々の公園」と形容した。⁵⁹ 彼はセントラル・パークを設計する際、循環システムや、歩行者道、オープンスペース設置、湖造成、牧歌的な風景の創造において、パクストンによるパーケンヘッド・パークのデザインを参照したのみならず、地方自治精神や民主的なメッセージを織り交ぜるという点でもパーケンヘッドの例に倣ったのである。

おわりに

パーケンヘッド・パークは、自治体の郊外創造から出発したが、後に一般大衆のためのパブリックスペースとして定着した。本公園は、イギリスにおける公園運動に多大な影響を与え、各産業都市において、パーケンヘッドを模した公園が次々と造られていった。本公園における財源確保、デザインおよびパブリックスペースという理念が、国内や世界の公園造りにも受け継がれていった。本公園はヴィクトリア朝を代表するにふさわしいオープンスペースであり、パブリックスペースであった。

注

本稿はヴィクトリア朝文化研究会第8回大会（2008年11月15日、於関西大学）における口頭発表原稿に加筆・修正を施したものである。

1. George F. Chadwick, *The Works of Sir Joseph Paxton 1803-1865* (London: Architectural Press, 1961).
2. 例えば、以下の文献を参照した。John Archer, "Country and City in the American Romantic Suburb," *The Journal of the Society of Architectural Historians*, vol. 42,

- no. 2 (1983): pp. 139-56; 片木篤 『イギリスの郊外住宅 - 中流階級のユートピア』 東京、住まいの図書館出版局、1987年、p. 64。
3. Hazel Conway, *People & Parks: The Design and Development of Victorian Parks in Britain* (Cambridge: Cambridge University Press, 1991).
4. Roy Rosenzweig, *The Park and the People: History of Central Park* (New York: Holt, 1994).
5. パクストンの生涯とその業績に関しては、以下の文献を参照した。Chadwick, *op. cit.*; Kate Colquhoun, *A Thing in Disguise: The Visionary Life of Joseph Paxton* (London: Harper Perennial, 2004); Brent Elliot, *Victorian Gardens* (London: B.T. Batsford, 1986).
6. Wirral Archives, *Birkenhead Improvement Committee Minutes*, July 1843-January 1845. 当該委員会は、1845年1月以降、Birkenhead Road and Improvement Committeeへと名称を変更した。
7. Conway, *op. cit.*, p. 11.
8. Parliamentary Paper, *Report from the Select Committee on Public Walks*, 1833, p. 3.
9. *Ibid.*, p. 8-9.
10. Henry W. Lawrence, "The Greening of the Squares of London: Transformation of Urban Landscapes and Ideals," *Annals of the Association of American Geographers*, vol. 83, no. 1 (1993): pp. 90-118; 坂井文 「ロンドンの近代都市公園計画におけるスクエアの影響に関する歴史的研究」、『ランドスケープ研究』(2004): 67巻5号、pp. 439-42。
11. Conway, *op. cit.*, p. 12.
12. John C. Loudon, *Derby Arboretum: Containing a Catalogue of the Trees and Shrubs* (London, 1840). なお、Loudonは本公園の設計家である。
13. Conway, *op. cit.*, pp. 16-17. 1830年代のイギリスの諸都市においては、地元の裕福な商人や実業家からなる自治体が自治を執行していた。これらの自治体は、各都市によって the Municipal Corporation とか the Improvement Commission, the Manorial Court, the Surveyors of Highways といった異なった名称を持つ。
14. Clifford E. Thornton, *The Peoples' Garden: A History of Birkenhead Park* (Wirral: Metropolitan Borough of Wirral, undated) p. 2.
15. Helen Meller, *Leisure and the Changing City, 1870-1914* (London: Routledge, 1976) p. 96.
16. Alan Tate, *Great City Parks* (London: Spon Press, 2001) p. 75. 彼らは地元の名士として自治体の中心的役割を果たしただけでなく、後に政治や経済界において重要な位置を占めた。
17. Conway, *op. cit.*, p. 46.
18. Meller, *op. cit.*, p. 112.
19. Philip J. Waller, *Town, City and Nation: England 1850-1914* (Oxford: Oxford University Press, 1983) p. 181.
20. この地図は以下の文献から転載した。Carol E. Bidston, *Birkenhead ... of Yesteryear* (Wirral: Metropolitan Borough of Wirral, 1985).

21. *Birkenhead Improvement Committee Minutes*, 14 July 1843.
22. *Ibid.*, 6 September 1844.
23. Walter L. Creese, "Imagination in the Suburb," in U.C. Knoepfelmacher and G.B. Tennyson (eds.), *Nature and the Victorian Imagination* (Berkeley: University of California Press, 1977), p. 59; Ann Bermingham, *Landscape and Ideology: The English Rustic Tradition, 1740-1860* (Berkeley: University of California Press, 1986) p. 171; Kim Legate, "Shrubbery Planting 1830-1900," in Jan Woudstra and Ken Fieldhouse (eds.), *The Regeneration of Public Parks* (London, E & FN Spon, 2000) p. 91; Parklands Consortium, *Birkenhead People's Park: Restoration and Management Plan* (Wirral: Metropolitan Borough of Wirral, 1999), Fig.1/9; Thornton, *op. cit.*, p. 6; Conway, *op. cit.*, p. 88.
24. Chadwick, *op. cit.*, p. 51.
25. たとえば、Chadwick, *op. cit.*, p. 53; Creese, *op. cit.*, pp. 59-60; Parklands Consortium, *op. cit.*, p. 9.
26. Parklands Consortium, *op. cit.*, p. 9.
27. *Birkenhead Improvement Committee Minutes*, 22 January 1845.
28. Chadwick, *The Park and the Town: Public Landscape in the 19th and 20th Centuries* (London: The Architectural Press, 1966) p. 91.
29. レプトンとナッシュについては以下の文献をそれぞれ参照した。Stephen Daniels, *Humphry Repton: Landscape Gardening and the Geography of Georgian England* (New Haven: Yale University Press, 1999); John Summerson, *The Life and Work of John Nash, Architect* (London: Allen and Unwin, 1980).
30. Birmingham, *op. cit.*, p. 172.
31. Meller, "Rus in Urbe, Urbs in Rure: Changing Responses to Green Open Space in European Cities, 1850-2000," a paper for VI International Urban History Conference, Edinburgh, September 2002; Hilary A. Taylor, "Urban Public Parks, 1840-1900: Design and Meaning," *Garden History*, vol. 23, no. 2 (1995): p. 203.
32. Creese, *op. cit.*, p. 58.
33. Meller, "City and Nature: Green Open Spaces in European Cities," unpublished.
34. *Birkenhead Improvement Committee Minutes*, 8 September 1843 & 4 March 1844.
35. *Ibid.*, 7 March 1844.
36. *Birkenhead Road and Improvement Committee Minutes*, 18 June 1846.
37. *Birkenhead Improvement Committee Minutes*, 1 & 29 August 1844.
38. *Ibid.*, 7 & 28 March 1844.
39. Tate, *op. cit.*, p. 73.
40. *Birkenhead Improvement Committee Minutes*, 20 November 1843 & 15 February 1844.
41. 3つの橋のうち、スイス橋だけが現存している。
42. Samuel Stansfield, *Report of the Sanitary Condition of Birkenhead* (Liverpool, 1843) quoted in Thornton, *op. cit.*, p. 3.
43. Thornton, *op. cit.*, p. 3.

44. バクストンの手紙は「改良委員会」で朗読された。*Birkenhead Road and Improvement Committee Minutes*, 27 August 1845.
45. Parklands Consortium, *op. cit.*, p. 8.
46. *Birkenhead Road and Improvement Committee Minutes*, 24 September and 1 October 1845.
47. *Ibid.*, 11 February 1846.
48. Monique Mosser and Georges Teyssot (eds.), *The History of Garden Design: The Western Tradition from the Renaissance to the Present Day* (London: Thames and Hudson, 1991) p. 18.
49. *Birkenhead Road and Improvement Committee Minutes*, 6 May 1846.
50. *Ibid.*, 27 June 1850.
51. *Ibid.*, 3 April 1854.
52. *Ibid.*, 20 November 1861.
53. *Ibid.*, 28 January 1846.
54. *Ibid.*, 28 June 1855.
55. Conway, *op. cit.*, p. 90.
56. Parklands Consortium, *op. cit.*, p. 2.
57. 式典の様子は、本稿に転載した 図3 および 図4 の図とともに、*The Illustrated London News*, 3 & 10 April 1847に報告された。
58. Colquhoun, *op. cit.*, pp. 179-80.
59. Frederick Law Olmsted, *Walks and Talks of an American Farmer in England* (New York: 1852) pp. 52-53.

論文

南方熊楠と『ノーツ・アンド・クエリーズ』誌

‘Footprints of Gods, &c.’から「ダイダラハウシの足跡」へ

志村 真幸

はじめに

南方熊楠(1867-1941)は前半生をアメリカとイギリスで過ごし、学術的な執筆活動についても、『ネイチャー』(1893年に初掲載)、『ノーツ・アンド・クエリーズ』(以下、『N&Q』と略記)』(1899年に初掲載)で開始している。日本語で執筆を始めるのは帰国後の1904年のことであり、熊楠の論考執筆のスタイルは海外時代に形成されたといえる。

このうち『ネイチャー』への投稿については、比較的良く研究されてきた。¹ 雑誌自体の著名さ、熊楠が最初に投稿した雑誌であることなどが理由として挙げられる。しかし、『N&Q』掲載論考についての研究は、『ネイチャー』掲載論考との関係、初掲載論考の検討にとどまり、² ほとんど手が触れられずにきた。ところが、『ネイチャー』掲載論考は合計でも50本であり、1914年には途絶えてしまうのに対し、『N&Q』掲載論考は324本にもおぼり、投稿も晩年の1933年まで続いた。それにもかかわらず、研究されてこなかったのは、論考の内容が雑多であるほか、この雑誌の特殊な性格が壁となったものと思われる。『N&Q』は読者投稿による質疑応答の雑誌であったため、熊楠の論考だけを読んでいても内容が理解できない。前後の質問や応答(筆者の調査では合計で約1500本になる)と合わせての分析が必要なのである。

しかしながら、熊楠研究において『N&Q』は重要な意義を持つ。第一に、英文論考と日本語論考との関係を考えるに欠かせない。日本語論考には、英文論考を翻訳したり、そこからふくらませて書かれたものが少なくない。内容や用いる文献にも共通性が認められるのである。しかし、詳細な調査はご

く一部を除いて行われておらず、研究の必要がある。現在、『N&Q』掲載論考のうち180本あまりに日本語の論考や書簡等との関係が判明しているが、これは熊楠研究において見落とすことのできない数字であろう。そのなかから本稿では‘Footprints of Gods, &c.’と、帰国後に書かれた最初の民俗学的な日本語論考「ダイダラハウシの足跡」を取り上げ、両者を比較・検討したい。

熊楠の日本語論考を見るのに『N&Q』が欠かせないことは、帰国後の両誌への投稿数の違いからも明らかである。『ネイチャー』掲載50本のうち、在英時に書かれたものは38本、帰国後は12本となる。これが『N&Q』では在英時16本、帰国後308本なのである。さらにいえば、これは掲載された本数であり、実際には不掲載/未掲載に終わった論考も多数ある。こちらも『ネイチャー』では5本だけだが、『N&Q』では現在確認されているものだけでも70本以上になる。³ 帰国前後に『ネイチャー』から『N&Q』への移行があったのは間違いなく、『N&Q』初期投稿の検討は大きな意味を持つのである。なお、補足しておくならば、両誌とも1932年末まで定期購読を続けている。⁴

第二に取り上げたいのは、熊楠の執筆スタイルの問題である。従来、熊楠の日本語論考は、話題がきわめて広汎で、しかも連想のように飛躍・展開していくのが、魅力でもあり、読みにくさでもあると評価されてきた。熊楠の文章は、現在の目から見れば、とても論文とは見えない。一方で、英文論考は形式として整っていることが指摘される。⁵ しかし、このことは『ネイチャー』の主要な論考には当てはまるが、『N&Q』の場合にはかならずしも適合しない。むしろ、『N&Q』の論考は、内容の雑多さ、考察・分析の欠落という点で日本語論考との類似性を持つ。内容や使用文献だけでなく、スタイルという点でも比較検討しなければならないのである。なおかつ、そのスタイルは熊楠のみに限らず、他の投稿者による『N&Q』掲載論考と共通する点があると考えられる。ここから熊楠の文章の淵源に迫れるのではないだろうか。

そして、第三点である。これまで『ネイチャー』や『N&Q』は、熊楠が論考を発表するための場としてしか位置づけられてこなかった。しかし、一方的な関係だけ見ては不十分である。両誌は、論考執筆のための情報収集の

場として機能したのではないか。この点についても‘Footprints of Gods, &c.’と「ダイダラハウシの足跡」から考えてみたい。

さらに加えて、『N & Q』は日本の民俗学の出発においても少なからぬ意味を持つ。熊楠が柳田国男や高木敏雄に協力して1913年に創刊された『郷土研究』は、最初の民俗学専門誌と位置づけられる。そのモデルのひとつが『N & Q』であり、実際に『N & Q』を真似た質疑応答欄が設けられるなどしたのである。熊楠は手探り状態であった日本の民俗学に、欧米の最新の方法論や研究成果を伝える役割を果たしたが、その際に選ばれたのが『N & Q』だったのである。熊楠と『N & Q』の検討により、日本における民俗学の原点を明らかにすることが期待される。

1 『N & Q』

まず、『N & Q』について簡単な説明をしておきたい。現在では英文学の専門誌として知られる同誌だが、そのようになったのは1960年代以降のことであり、以前は文学、民俗、歴史、語源、人類学、動物学、植物学などの総合誌であり、投稿者も研究者とアマチュアが入り混じっていた。

『N & Q』は、1849年11月3日、貴族院の文書館に勤務するウィリアム・ジョン・トムズによって創刊された。トムズは民間の習俗や迷信、行事、俗謡などの総称として「フォークロア」の語を生み出した人物であり、『N & Q』はそれらの情報収集、質疑応答のためにつくられたのであった。

『N & Q』の特徴は、全頁が読者投稿で埋め尽くされていることにある。誌面は「ノート」、「クエリー」、「リプライ」の3つの欄に分けられる（創刊～1920年代）。ノートは知識や情報を提示するもので、現在の学術論文に近いものから、ごく簡単に事例を挙げたものまで多様である。クエリーは、読者から広く情報を求める問いかけのことで、短文が多い。リプライは、クエリーへの返答であり、長短さまざまであった。ノートにリプライが付くことも多い。リプライは1本だけでは終わらず、数十人から寄せられることもあった。何年にもわたってリプライが続くこともしばしばで、先行するリプライへの訂正が行われたり、議論となることも少なくない。もちろん、まったくリプライの付かないクエリーもある。熊楠は中山太郎宛書簡（1926年1月

30日付）で『N & Q』のことを「随筆問答雑誌」⁶と表現しているが、現在のインターネット上の掲示板を想像してもらったのが分かりやすいかも知れない。熊楠のデビューした1899年6月3日号を例として見れば、ノート20本、クエリー23本、リプライ41本の合計84本が掲載されている。ひとりで複数の論考を載せているケースもいくつかある。

論考の長さはさまざまで、数頁に及ぶものもあるが、大部分は十数～数十行程度の短いものであった。一般に、情報を簡潔に示すスタイルで執筆され、羅列的という表現がぴったりくる。考察や分析がきちんといわれることはまれである。この点も『N & Q』の特筆すべき点といえよう。情報源は書物・雑誌・新聞が中心であり、自身の体験や伝聞も混じっている。書誌情報の提示は徹底されている。熊楠の論考も、こうした『N & Q』のスタイル、またノート、クエリー、リプライの網のなかで理解しなければならないのである。

創刊当初から第二次大戦後まで週刊（第一次大戦後期に一時月刊化）、本稿で扱う19世紀末には各号20頁であった。当時、購読期間は一年間と半年間があり、年間購読料は1ポンド6ペンス、半年では10シリング3ペンスであった。

投稿者の多くはイギリス人であるが、アメリカ人、フランス人も相当数おり、そのほかのヨーロッパ諸国、またイギリスの海外植民地からの投稿（イギリス人が大部分、現地人も少数）も少なくなかった。アジアからの投稿者もインド人を中心に初期から見られるが、大量の投稿を長期間にわたって継続したのは熊楠が最初である。熊楠に次ぐ日本人投稿者は佐藤彦四郎で、1924-38年に27本が掲載されている。第二次大戦後は斎藤勇（たけし）、荻田庄五郎（いずれも1951年）など英文学者による投稿が見られるようになる。

2 熊楠の在英時の投稿について

本節では熊楠の『N & Q』への投稿開始と、その内容についておおまかに確認しておきたい。

熊楠が『N & Q』への投稿を始めたきっかけについては、現在、まだ明らかになっていないが、『ネイチャー』以外に論考発表の場を求めていたところ、フォークロア・ソサエティーの重鎮であり、『N & Q』の投稿者でもあったG.

L. Gomme に紹介されたと考えられている。投稿を始めるのは簡単で、予約金を払って購読者になれば良い。ただし、熊楠の最初期の購読料支払いについては確認されていない。日記から支払いが確認されるのは1902年以降である。⁷

熊楠の日記に初めて『N & Q』への言及があらわれるのは、1898年2月2日のことである。⁸ 大英博物館で閲覧し、のちの「燕石考」につながる論考を発見したと書かれている。これは同時期に作成された「ロンドン抜書」37巻のメモからも確認される。しかし、次の記述は1899年6月3日、「予の文(A Witty Boy 外一) Notes and Queries に出居る」⁹と、自分の論考が初めて掲載されたことへの言及になってしまう。投稿・執筆の過程は書かれていないのである。

しかしながら、『N & Q』投稿にいたった動機や背景については、当時執筆意欲が高まっていたこと、『ネイチャー』への投稿が雑纂的になっていたことなどが指摘されている。¹⁰ なかでも大きかったのは、フォークロア的なものへの関心の高まりであり、そのために『N & Q』が新たな投稿先として選ばれたものと考えられる。また、『N & Q』デビュー以降は、『ネイチャー』への投稿が自然科学・技術分野に絞られていく。

さて、「A Witty Boy 外一」とあるように、熊楠は‘A Witty Boy’(ノート)それから「外」に当たる‘The Invention of the Gimbal’(クエリー)の2本で『N & Q』にデビューした。なお、署名は「Kumagusu Minakata 7, Effie Road, Walham Green, S. W.」とされている。

‘A Witty Boy’はイタリアと中国に類似の説話があることを示している。まず、14-15世紀の物語作家サケッティとポッジョから、賢い子どもにやりこめられた大人が、神童といわれるような子どもでも大人になれば馬鹿になるものだと嫌味を言ったところ、子どもに「あなたも子どもの頃はたいへんな知恵の持ち主だったのでしょ」と逆にへこまされる話が引用され、つづいて同様の例が、五世紀の劉義慶『世説新語』から紹介される。ここで熊楠は「こうした話の発明で、中国人がヨーロッパ人よりも早かったことを記しておく面白いのではないか」¹¹と述べている。

‘The Invention of the Gimbal’は、ジンバルの発明について問い合わせたものである。これには編集部が熊楠の文章に続けて、1577年には記述があると

回答しており、リプライは付かなかった。ジンバルとは航海に用いられる器械で、コンパスやクロノメーターを水平に保つための十字型をした吊り下げ装置である。これについても、熊楠には東西比較の意図があったのではないかと考えられる。というのも、『日本及日本人』(1922年9月15日号)掲載の短文「廻り香炉と扇風機」のなかで、『西京雜記』から廻り香炉の発明の記事を引き、「これは英話にいわゆるジムバルの創製は支那人に出た証拠で、今日船舶用の羅鍼盤のジムバルははるか後に欧州へ伝わったのだ」¹²と述べているからである。

この2篇に共通するのは、東西の比較である。熊楠にはイギリス人投稿者には扱いつらい中国語や日本語の文献を渉猟することが可能で、まさにこの点に『N & Q』における熊楠の独自性と存在意義があったといえる。こうした手法は帰国後の投稿でも継続されていくことになる。

初掲載に気を良くしたのか、熊楠は翌4日に‘Walrus’(クエリー、6月24日号)を、さらに7日には‘Beaver and Python’(ノート、7月8日号)と‘Swim-Shell’(クエリー、7月22日号)を投稿している。それ以降、1900年9月1日、ロンドンを阿波丸で出航するまでの一年数ヶ月で計16篇が発表されることになる。‘Chinese Medicine’(リプライ、7月1日号)‘The Wandering Jew’(ノート、8月12日号、8月26日号、1900年4月28日号)‘Flying Cups’(ノート、1900年2月24日号)など、説話学・民俗学・人類学にかかわる論題が多い。この期間に不採用/未掲載となった投稿はない。

最初期には『ネイチャー』論考の焼き直しなども見られるが、次第に書き分けが行われるようになり、また『N & Q』的なテーマや形式についても身につけていく。当初はクエリーやノートを出してもリプライが付かなかったのだが、次第に議論として盛り上がるようなものが増えていく。そして帰国直前、集大成として書かれたのが‘Footprints of Gods, &c.’であった。

3 ‘Footprints of Gods, &c.’

本節と次節では、在英時の投稿から‘Footprints of Gods, &c.’を取り上げ、前後のノートやリプライの内容を確認し、それらが帰国後の日本語論考へどのように発展していくか分析することにしたい。‘Footprints of Gods, &c.’を

対象とするのは、これが充実した内容を持ち、前後の質疑応答とも関係が深く、在英時を代表する論考と位置づけられるからである。また、熊楠が帰国後に続報を出し、日本語化に取り組んでいる点からも彼の関心の高さがうかがわれる。なお、これは一般に「神跡考」として知られる論考である。

‘Footprints of Gods, &c.’は、神、預言者、歴史上・想像上の著名人などが岩上に残した足跡を扱った論考である。冒頭部分から引用すれば、「北米・パイストーン石切場の端には、「グレート・スピリット」の足跡が岩上に残されており、まるで巨大な鳥の足跡のようである。古代メキシコの神々の祭では、穀物粉をまいた上にテスカトリポカの足跡があらわれ、神々の到来を示す合図となるとされた。ピエドライトによれば、チブチャ人のあいだで、諸法典をつくり、糸紡ぎと織物の技術を創始した神と信じられるチミサパグアの足跡を印した岩がコロンビアにある。サウジーは聖トマスの足跡がブラジル・バイアの海岸に残されているという。ペルーにも同じ聖人の足跡があり、スペイン人の来訪以前から信仰されていたと記録がある」¹³と事例が列挙されていく。そして世界各地に共通の現象であると指摘され、祖先信仰との関連、故人の移し身としての足跡などのアイデアが提示される。膨大な数の文献が引用され、無数の事例が挙げられた、いかにも熊楠らしい論考である。

この論考は1900年7月5日に投稿され、9月1日号、9月22日号、10月27日号の3回にわたって分載された。熊楠がイギリスを離れた、まさにその9月1日に出たわけである。熊楠は帰国後にも続報を投稿している。1903年5月9日号掲載の‘Footprints of Gods, &c.’(リプライ)と、1904年7月23日号掲載の‘Footprints of the Gods’(ノート。これのみタイトルが微妙に異なるが、熊楠が編集部への誤記であろう。ほかにも例がある)である。さらに1907年6月28日にもリプライを投稿したことが日記から確認されるが、これは未掲載に終わっている。

日記から執筆の経緯をたどると、まず1900年2月2日に「朝、家居、仏足石のことしらべる。」¹⁴と執筆に向けて材料を集め始めている。さらに3月23日に「九時二十分より『ノーツ・エンド・キリー』へFoot-outlineのこと起稿す。」¹⁵と原稿執筆に取りかかる。4月1日には、「六時より『ノーツ・エンド・キリー』へ状認む(Foot-outlines as Records of Pilgrimage or Visit)。」¹⁶と

あり、当初はこのタイトルで執筆されていたことが分かる。5月13日には「夕に至り「仏足石論」草稿成る。夜、深更迄訂正す。」¹⁷と草稿が完成、6月5日に、「朝、早起、「仏足石」浄書畢る。一時五十五分也。(引用書、和三一、漢一三、英二八、仏五、伊二、独四、西二、梵三、羅一、合計八九。)」¹⁸と一応の完成を見る。引用文献が89点にのぼったことから明らかなように、非常に長大な論考であった。そして、巽孝之丞に草稿チェックをしてもらい、¹⁹7月5日に『ノーツ・エンド・キリー』への状出す。「仏足石論」也。」²⁰と投稿に至る。5ヶ月あまりをかけ、ようやくの完成であった。

さて、3月23日には「Foot-outline」、4月1日には「Foot-outlines as Records of Pilgrimage or Visit」と記されているが、これは掲載タイトルの‘Footprints of Gods, &c.’とは異なっている。実は「Foot-outlines as Records of Pilgrimage or Visit」とは、1899年10月14日号掲載のF. W. Greenによるノートのタイトルで、熊楠の論考はもともとこれへのリプライとして書かれたのであった。タイトルが違うため、この点はずっと見過ごされてきたが、熊楠の‘Footprints of Gods, &c.’を理解するには、先行するGreenらの議論を含めて検討しなければならないのである。Greenのノートには大きな反響があり、12月2日号にはWilliam Crookら5人からのリプライが載り、また編集部から「このほかにも非常に多くの同じ内容のリプライがあった」²¹ことが注記されている。

しかしながら熊楠は執筆を進めていくなかで、無数の事例を集め、独自の視点を持ち込んでいく。そのことで自信を得たのか、タイトルを改め、ノートとして投稿することになったのである。ただし、9月1日号掲載分の冒頭には、Greenらを参照せよとの一文が入っている。²²

さらに熊楠以降についても確認する必要がある。熊楠のノートに対して、1900年11月17日号にはC. C. B. から、翌1901年3月23日号にはIbagueからのリプライが出るのである。また1903年2月14日号にはWilliam E. A. Axonの‘Footprint of the Prophet」と題するノートが掲載される。これにも熊楠らを見よとの注記がある。²³ Axonのノートには、3月21日号でEdward Peacockによるリプライが付いた。

以下、この一連の論考(1899-1904年)について、どのような事例が示されているか見ていきたい。事例の羅列のようではささか煩雑であるが、これは

もとの論考自体がそうだからである。各論考には、A～Oの番号を振った。

- A. 1899年10月14日号 F. W. Green 'Foot Outlines as Records of a Pilgrimage or Visit' ノート
ケントのグードハースト教会の塔の屋根には、多数の巡礼者の足形を鉛板に刻んだものがある。巡礼の証として、足跡を刻む習慣は広く見られ、エジプトではアメンホテプ3世の寺院にある。同様の例を教えて欲しい。すでに分かっているのは、エルサレムのオマール・モスクのムハンマドの足跡、シナイ半島にあるムハンマドのラクダまたは口バの足跡、インドからイギリスに持ち帰られた足形。世界に共通して見られるのは、原始的なアイデアはどこも同じだからか。
- B. 1899年12月2日号 William Crook 'Foot Outlines as Records of a Pilgrimage or Visit' リプライ
ヘロドトスの記録にあるエジプトのペルセウスの足跡、オランダ・スバの聖人の足跡、ポロウデイルの悪魔の足跡、アイルランドの魔法の牛の足跡、セイロンのアダムズ・ピークにある仏陀の足跡、オークニー諸島の聖マグヌスの足跡、南米のケツアルコアトル、インドの聖なる牛の足跡などを列挙。さらに『人類学雑誌』、『N & Q』の古い号、人類学者のタイラーの研究なども紹介。
- C. 1899年12月2日号 Donald Ferguson 'Foot Outlines as Records of a Pilgrimage or Visit' リプライ
セイロンのアダムズ・ピークにある仏足石がもっとも有名。
- D. 1899年12月2日号 Lobuc 'Foot Outlines as Records of a Pilgrimage or Visit' リプライ
教会の屋根の鉛板に足形を刻むのは古くからの習慣。ポケットナイフで簡単にできる。
- E. 1899年12月2日号 J. T. F. 'Foot Outlines as Records of a Pilgrimage or Visit' リプライ
リンカンシャーのウィンタリングム教会に、詩人H. K. ホワイトの名を刻んだ足形。
- F. 1899年12月2日号 Thomas J. Jeakes 'Foot Outlines as Records of a Pilgrimage or Visit' リプライ

大英博物館のインド部門に巨大な足跡を刻んだ石がある。ブライトンのデヴィルズ・ダイクにあるのは、トーバーに上陸したウィリアム三世の足跡か？

- G. 1900年9月1日号 南方熊楠 'Footprints of Gods, &c.' ノート
タイラーから北アメリカのパイプ・ストーン石切場の「グレート・スピリット」の足跡、メキシコのテスカトリポカ神、コロンビア、ブラジルのバイアに聖トマスの足跡、『人類学雑誌』からフランスの古代遺跡、スウェーデンの古代遺跡、ドナウ川にヘラクレスの足跡、パリやローマのキリストや聖人のもの、エジプトのオシリスに捧げられた足跡、ベチユアナランドでの祖先信仰、オリーブ山のキリストの足跡、セイロンの仏足石、玄奘の記したインドのもの、インドの聖トマス、タイ、サモア、ビルマ、ラオス、ニュージーランド、大和は「山の跡」の短縮形、ダイダラハウシの足跡、弁慶、役行者、曾我五郎の足跡。
- H. 1900年9月22日号 南方熊楠 'Footprints of Gods, &c.' ノート
垂迹を足跡の一種と見なす、若狭彦の神の足跡、高句麗王の馬の足跡、母が巨大な足跡を踏んで生まれたという伏羲、中国では鳥の足跡から漢字がつくられた、黄河の治水にまつわる足跡、道教にまつわる足跡、ラサのポタラ宮、中国越州の如来の足跡、動物の足跡。
- I. 1900年10月27日号 南方熊楠 'Footprints of Gods, &c.' ノート
東洋の足跡への信仰、高貴な人の踏んだ場所の扱い、手形や足形を証文などに利用すること、先人の業績などを「足跡」という、足跡は人間や動物の神秘的な分身と考えられた、メラネシアで近親の足跡を踏まない、イタリアで患者の足跡を使って治療する、ドイツで敵の踏んだ芝生を乾かすことで敵を倒す、足跡を身分証明に使う、仏陀の足の裏の印。
- J. 1900年11月17日号 C. C. B. 'Footprints of Gods, &c.' リプライ
偉人の足跡の近年の例としてはイプワースのウェズレーのものがある。
- K. 1901年3月23日号 Ibagué 'Footprints of Gods, &c.' リプライ
スペインの初期布教者のサン・ルイ・ベルトランがコロンビアの岩に足跡を残した。
- * 編集部が、マレー博士の戯曲『アンドロマケ』で、テティスとその神殿の近くに足跡を残す例を紹介。

- L. 1903年2月14日号 William E. A. Axon 'Footprint of the Prophet' ノート
インドに、イスラムの預言者が岩の上に足跡を残した例がある。
- M. 1903年3月21日号 Edward Peacock 'Footprint of the Prophet' リプライ
ロバート・サウジーがオランダのスパの近くで聖Rの足跡を見たところ
が、聖レマクルのことか？
- N. 1903年5月9日号 南方熊楠 'Footprints of Gods, &c.' リプライ
『栄華物語』、靴への信仰、プルタルコス。
- O. 1904年7月23日号 南方熊楠 'Footprints of the Gods' ノート
中国で花嫁の足跡を踏む風習、茄子の豊作のために足跡を付ける。

実に多くの事例が挙げられている。イギリスを初めとするヨーロッパ諸国から、インドやエジプトに広がり、南米なども目に付く。Green や Crook に人類学的な視点が見られるのも特徴だろう。投稿者の素性については一部が判明している。Ferguson は大学の研究者、Green、Axon、Peacock はアマチュアだがフォークロア集などを出版している。

応答関係の全体を見ていくと、いくつかの特徴が浮かび上がる。まず、事例の積み重ねという点である。さまざまな地域や時代から事例が報告されていき、集積された情報によって徐々に岩の上の足跡という現象が明らかになっていく。また、熊楠以外は分析や考察を加えていない点も注目される。あくまで事例の羅列なのである。これらは、『N & Q』という雑誌の意味と目的を明らかにしてくれる。すなわち、情報の収集こそが重要なのであり、投稿者の研究発表の場ではなかったのである。

次に熊楠の論考について、先行論考との関係を見てみたい。明らかになったのは、熊楠が先行する論考で挙げられた文献を使っていることである。Crook がBで示したタイラーや『人類学雑誌』が引用されている。ただし、Crook の引き写しというわけではなく、きちんと原典に当たり、詳細に内容を紹介している。とはいえ、このことから分かるのは、日記にあった89点もの引用文献も、すべてを熊楠が独自に見つけてきたわけではなく、少なくとも一部は先行論考から教えられたということである。これが熊楠の『N & Q』利用の第一段階となる（第二段階は日本語論考化）。

Crook が『N & Q』の古い号を挙げている点も指摘しておきたい。熊楠は

こちらでもチェックしているのである。実は「足跡」の話題が『N & Q』で盛り上がるのは、今回が初めてではなかった。1865-66年にも 'Human Foot-prints, etc., on Rocks' として出た話題だったのである。こちらは1865年11月25日号のH. C. のノートに始まり、11本のリプライが付いている。テーマは1899-1904年とまったく同一であり、挙げられる事例も重複するものが多い。こちらについても内容を紹介しておきたい。各論考には、～の番号を振った。

1865年11月25日号 H. C. 'Human Foot-prints, etc., on Rocks' ノート
マドラス南方のサン・トメは聖トマスが上陸した地とされ、近郊に足跡がある。セイロンのアダムズ・ピークにも人間の足跡が残っている。パラダイスを追放されたアダムが地上に降り立った場所という。岩に付けられた足跡にまつわる伝説が、イギリスやアイルランドにもあるか？

* 編集部がアダムの足跡への巡礼の記事を紹介。

1866年1月13日号 John S. A. Cunningham 'Human Foot-prints, etc., on Rocks' リプライ

スライゴアの農夫が玄関の敷石にしていた石には、真ん中に人間の足跡が刻まれている。アイルランドでは、後継者選びのときに初代族長の足を彫った石を使う。

1866年1月13日号 C. Durndell 'Human Foot-prints, etc., on Rocks' リプライ
聖アウクズチヌスがリッチバラ港から乗船したときの足跡が岩に残っている。

1866年2月10日号 P. Hutchinsor 'Human Foot-prints, etc., on Rocks' リプライ
マルタ島に聖パウロの足跡の付いた岩。ウィリアム3世がトーバーに上陸した際に付けた足跡。

1866年2月10日号 J. T. F. 'Human Foot-prints, etc., on Rocks' リプライ
ウェズレーの足跡が、リンカンシャーのイプワースにある彼の父親の墓石に。ウェズレーが説教壇を拒否して説教したときに付いた。

1866年3月17日号 D. 'Foot-prints on Stones' リプライ
ウェズレーのはもうない。

1866年4月7日号 J. T. F. 'Footprints on Stones' リプライ

D. のは間違い。自分はイプワースを良く知っていて、墓石も何度も見

ている。夏に再確認に行くつもり。

1866年4月7日号 J. M. H. 'Footprints on Stones' リプライ
ローマの聖セバスチアヌス教会に、クォ・ヴァディスのときのキリストの足跡。

1866年6月2日号 Cyril 'Footprints on Stones' リプライ
ヨークシャーのフード・ヒルにある巨大な黒岩の真ん中に足跡があり、「悪魔の足跡」と呼ばれている。

1866年7月14日号 Golundauze 'Human Foot-prints on Rocks' リプライ
ソロモンの宮殿跡に建てられたオマール・モスク。大天使ガブリエル、ムハンマドの足跡、彼のラクダの足跡。エジプト、アラビア、ダマスカスにもムハンマドの足跡。

1866年9月8日号 J. T. F. 'Human Foot-pints on Rocks, etc.' リプライ
ウェズレーについて再調査してきた。7月に現地に見に行ったが、足跡はあった。拓本も取ってきた。

1866年10月13日号 H. C. 'Human Footpints, etc., on Rocks' リプライ
アイルランド南部アハドー大聖堂近くの岩に2つのくぼみがある。聖なる修道士が200年も跪きつづけたためという。

こちらでは、ウェズレーの足跡を巡って議論になったのが特徴である。情報の積み重ねと訂正、再確認が行われているのが分かる。各論考で挙げられている事例は1899-1904年と重なるものが多いが、その範囲はヨーロッパからアラビア、インドまでであり、また人類学的視点は見られない。これは時代性であろう。こちらの投稿者については良く分かっておらず、Hutchinsonがアンティカリとして何冊か著作を残しているのが確認されるのみである。J. T. F. は1898-1904年の際にも論考を寄せている。

では、この2回の議論を受けて、熊楠はどのような日本語論考を執筆したのか。まずは帰国後の執筆活動の全体について触れておきたい。

日本に戻った熊楠が最初に発表したのは、1902年7月17日号の『ネイチャー』に掲載された 'Pithophora Oedogonia' であった。その後も『ネイチャー』、『N & Q』への投稿が続き、初めての日本語論考は、1904年7月の『東洋学芸雑誌』21巻274号に出た「ホトトギスについて」、「本邦産淡水生紅藻につい

て」、「梅について」の3本となる。²⁴ いずれも生物学をテーマとしている。それからまた日本語での活動は途絶してしまい（英文論考についても一時的な中断がある）再開されるのは1907年10月の『東洋学芸雑誌』24巻313号に「ペストと鼠の関係」と「桜の記」が掲載されてからとなる。さらに、いわゆる文系の論考としては、1908年4月の『東洋学芸雑誌』25巻319号に出た、「言葉のかずかず」、「ダイダラハウシの足跡」、「幽霊に足なしということ」が初めてとなる。なお、この時期も依然として英文がほとんどで、日本語が熊楠の活動の中心となるのは1909年7月以降となる。

さて、「ダイダラハウシの足跡」だが、これはまさに 'Footprints of Gods, &c.' を日本語に書き直したものであった。しかし、たんなる翻訳ではない。しかも、みずからの論考5本だけではなく、他の投稿者によるノートやリプライからも材料が取られているのである。この点について、以下、検証していきたい。

4 「ダイダラハウシの足跡」

「ダイダラハウシの足跡」は、日本中にダイダラハウシという巨人の足跡が残されていることから語り起こし、ヨーロッパ、アフリカ、アジア、アメリカなどの類例を並べた論考である。平凡社全集版にして4頁という短いもので、「Footprints of Gods, &c.」に比べてはるかに簡略化されている。分析や考察が削ぎ落とされ、事例の羅列というスタイルが徹底されているのである。

執筆の経緯をたどると、1908年3月18日の日記に「臥内ダイダラハウシの事を調べ。」²⁵ と出てくる。そして23日には早くも「ダイダラハウシの足跡、草しおはる。」²⁶ と草稿が完成、28日には「榎本勝多状一（東洋学芸雑誌への投書。言葉のかずかず、ダイダラハウシの足跡、幽霊に足なしといふ事、三条）」²⁷ と他の2本とともに投稿に至る。構想から完成までわずか10日である。「Footprints of Gods, &c.」に5ヶ月かかったのとは大違いだが、これも英文の材料を日本語にまとめ直したただだからであろう。また、掲載内定後の4月26日の日記には、「ダイダラハウシの足跡」に16種の引用文献を用いたことが記されており、²⁸ 英文にくらべると大幅に少なくなっていることも分かる。

本文では、導入部でダイダラハウシについて触れたあと、「八年前の拙著『神跡考』(Kumagusu Minakata, "Foot-Prints of Gods, etc.," in Notes and Queries, 9th ser., vi, 1900, pp. 163-165, 223-226, 322-324)」²⁹と、自身の『N & Q』掲載論考をもとにしたことが明記されている。

さて、「ダイダラハウシの足跡」には、『N & Q』論考がどのように使われているのか。まずは本文から簡単に見ておきたい。「八年前...」の直後には、「支那の史乘に、大沢中に巨人の跡を履みし婦人が、たちまち伏羲、また棄を孕めりとあるは、あるいはかかる窟穴の、実に地上に存せしに基づける旧伝にもあらんか。(サウゼイの『一八五五年秋和蘭遊記』に、スパ付近にルマクル尊者の足跡あり、婦女妊を欲する者詣りてこれを踏む、とあるは石に彫り付けたるなり)」³⁰とある。伏羲については熊楠の書いた論考Hから、ルマクルも投稿者名は挙げられていないが、CrookのBとPeacockのMから取られている。「ダイダラハウシの足跡」は、このように切り貼りで作られた論考だったのである。

以下、取り上げられている事例を順番に示し、その出典を「A」～「O」、「」～「」で示したい。分かりやすくするため、熊楠の『N & Q』掲載論考については、特別に「熊H」、「熊I」とした。『N & Q』には見られない材料は「新」とする。

ダイダラハウシ「熊G」、タイラーから丘の窟地「B」、盗賊の大將軍大太郎「新」、伏羲「熊H」、スパの聖ルマクル「BM」、八ヶ岳「新」、サモア「熊G」、黄河「熊H」、タイラーから動物「B」、アダムズ・ピーク「BC熊G」、エルサレムのオリーブ山「熊G」、エルサレムのムハンマド「A」、インドのムハンマド「L」、薬師寺「新」、中国・越州「熊H」、高麗「熊H」、ポタラ宮「熊H」、タイの仏・ゾウ・トラ「熊G」、インドの聖トマス「熊G」、ドナウ川「熊G」、ヘロドトス「B」、ベチュアナランド「熊G」、コロンビア「熊G」、ニュージーランド「熊G」、ハワイ「熊G」、教会の鉛板「ADE」、エジプトの足形「A」、ウィリアム三世「F」、韓非子「新」、足跡への信仰「熊I」、先人「熊I」、オーストラリア「新」、『人類学雑誌』「B」、フランスの遺跡「B」、スウェーデンの遺跡「熊G」、メラネシア「熊I」、ドイツでの敵「熊I」、イタリアの治療法「熊I」、アイルランドの首長「」

弁慶「熊G」

こうしてみると、熊楠のG、H、Iをもとにしながら、CrookのBにもかなり頼り、JeakesのFやCunninghamの、などの論考も随所で取り上げられていることが分かる。ただし、1865-66年のものはあまり用いられていない。すべての論考をチェックしたわけではないのかも知れない。ウェズレーについて言及がない点も注目される。新しすぎる点が敬遠されたのだろうか。また、おおまかにいえば、イギリスの事例は他の投稿者から引き、その他の地域については自身の論考をもとにしている。

以上から明らかになったのは、「ダイダラハウシの足跡」は、自身の論考を中心しつつ、前後のノートやリプライの内容を取り込んで執筆されたということである。もちろん、これを盗用だなどというつもりはない。むしろ、こうした二次的な利用にこそ『N & Q』の存在意義があったのではないだろうか。

なお、こうした例は‘Footprints of Gods, &c.’と「ダイダラハウシの足跡」に限られず、多くの論考で確認されるものである。たとえば「ダイダラハウシの足跡」と同時に投稿した「言葉のかずかず」にはWatsonの『N & Q』掲載論考‘Richard Pincerna’(リプライ、1904年7月30日号)が引用され、「幽霊に足なしといふ事」は熊楠自身の‘Lithuanian Folk-lore: Legless Spirits’(リプライ、1908年1月11日号)を原型として、さらにPlatt, Jun.(クエリー、1904年8月31日号)とRatcliffe(リプライ、1904年10月5日号)の論考が取り込まれている。テーマが足ということで、‘Footprints of Gods, &c.’も用いられている。

以後の日本語論考でも『N & Q』は使われつづけ、いくつか例を挙げるなら、‘Single Tooth’(クエリー、1903年6月20日号、ノート1907年3月16日号)は、「一枚歯 - 歯が生えた産れ児」として日本語化され、『人類学雑誌』(30巻11号、1915年11月、31巻1号、1916年1月)に掲載されたが、このなかにはForshaw(リプライ、1903年7月25日号)やMorgan(リプライ、1908年7月25日号)の寄せた論考が取り込まれている。‘Extracting Snakes from Holes’(ノート、1913年8月2日号)は、「蛇を引き出す法」『民俗』(1年2報、1913年9月、2年2報、1914年4月)および「蛇に関する民俗と伝説」『太陽』(23巻1、2、6、14号、1917年1、2、6、12月)となり、W. F. Prideaux(リブ

ライ、1913年8月30日号)とFirebrace(リプライ、1913年8月30日号)が用いられている。熊楠の日本語論考は『N & Q』と切っても切り離せない関係にあることがわかる。

結 論

第一に指摘したいのは、「ダイダラハウシの足跡」が『N & Q』誌面からの切り貼りで書かれている点である。この論考では、各地に共通する現象があることを示すことが意図された。そのためには世界中から事例を引いてくる必要がある。確かに熊楠は日本語と中国語はもちろん、英語、フランス語、ドイツ語などの書物も自在に扱うことができた。それでも、個人で目を通せる文献の数、集められる事例には限りがある。しかも、帰国してしまった熊楠には、西洋の文献を自由に扱うことができない。そのために他の投稿者による論考が使われたのではないか。『N & Q』の誌面はいわば素材の集積場であり、そこから取捨選択・整理して書かれたのが「ダイダラハウシの足跡」だったのである。

次に熊楠の文体について取り上げたい。最初に述べたとおり、熊楠の文章は羅列的であり、テーマが連想的に飛躍するのが特徴とされる。「ダイダラハウシの足跡」は、まさにそのとおりである。こうした特徴は『N & Q』の誌面に似ているのではないか。地域や時代の異なる事例が列挙され、リプライが続くなかで対立する意見が出ることすらある。それは誌面では仕方ない。執筆者がひとりではないからだ。何人もの投稿者による多数の論考によってひとつのテーマが語られているのである。それを1本の論考にまとめようとした場合、よほどの意志と工夫がなければ、統一的な視点や論理性でまとめられるものではない。熊楠がしたような事例の切り貼りだけでは、なおさらである。

あるいはむしろ、熊楠は積極的に『N & Q』的であろうとしたのかも知れない。競合者のいない日本で、新しい学問である民俗学を始めようとしていた熊楠は、ひとりで『N & Q』を再現しようとしたのだとも考えられる。日本人読者に民俗学的研究の実例を示すには、それが手っ取り早い方法と思われるのだろう。また、『N & Q』によって執筆スタイルを身に付け、『N & Q』

掲載論考の書き直しによって日本語での執筆を始めた熊楠には、もはやほかの書き方はできなかった可能性すらある。熊楠が書くものは、すべからく『N & Q』に似たものになってしまったのかも知れない。

そして第三点として、熊楠が『N & Q』を自身の論考を発表する場としてだけではなく、材料収集にも使っていた点が明らかになった。そもそも当時の『N & Q』は、現代の学術誌とはことなり、完成した論文を掲載する場ではなかった。誰かの役に立つであろう事実を報告したり、自分の欲しい情報を求めたり、質問に答えたりする雑誌だったのである。当然、そこで得られた情報は自由な利用が許される。現在の研究者の感覚からすると違和感があるかも知れないが、こうした場が19世紀末のイギリスに存在したことは無視できない。近代的な研究者があらわれ、最初から最後までオリジナリティが必須とされるようになる以前の知的世界と位置づけられるのではない。

情報の利用は一方通行ではない。熊楠だけが得をしたのではなく、彼が『N & Q』に寄せたノートやリプライが、他人の研究や著作に利用されることもあった。この側面についてはほとんど研究が進んでいないが、熊楠が『ネイチャー』に寄せた「The Antiquity of the “Finger-Print” Method」(1894-96年)に関しては、いくつかの例が指摘されている。³¹ また、A. Collingwood Leeが1909年に出版した*The Decameron; its sources and analogues*には、熊楠の『N & Q』掲載論考「The Envied Favourite」(1904年12月14日号)が名前を挙げて言及されている。³² あるいは熊楠が「ダイダラハウシの足跡」で投稿者の名を挙げていないように、熊楠が提供した情報も、彼の名を出さないまま使われている可能性がある。それらについては、今後の詳細な研究を待つしかない。『N & Q』誌上の情報や知識は誰かの専有物ではなく、投稿者/読者の共有財産だったのである。本稿だけで結論が出せるわけではないが、19世紀イギリスの知を取り巻く背景として指摘しておきたい。

『N & Q』的な知的世界は、日本では『郷土研究』によって引き継がれる。詳しくは別稿で改めて論じたいが、民俗学という学問には、全国から広く情報を収集する必要がある。現在ではフィールドワーク、聞き取り調査を行うのが普通だが、当初は研究者も少なく、方法論も確立されてはいなかった。一方で、近代化によって伝統文化は急速に消失しつつあった。そこで考えられたのが、地方の情報提供者の創出と組織化だったのである。全国の教員や

知識人に呼びかけ、各地の慣習や民話について報告してもらおう。のちに柳田国男が大々的に行う方法だが、それを最初に実践したのが『郷土研究』であった。通信者から寄せられた原稿を掲載し、質疑応答欄では必要なテーマについて広く募集する。そうすることで、全国からの情報の結節点として機能したのである。それはまさに『N & Q』的な空間であり、ここから日本の民俗学は出発したのであった。日本の民俗学を考えるうえでも『N & Q』は見落とせない存在なのである。

本稿では、熊楠在英時の『N & Q』への投稿について確認し、さらに‘Footprints of Gods, &c.’と「ダイダラホウシの足跡」の比較から、熊楠の論考執筆のスタイルへと迫った。熊楠は日本人という強みを生かして東洋の事例を『N & Q』に報告し、西洋と対比することで独自の地歩を得た。しかし、東西比較という視点は事例の収集を必要とするため、他の投稿者による論考が利用され、そのなかで熊楠の日本語での執筆スタイルもつくられていったのであろうと考えられる。しかし、それは熊楠だけではない。『N & Q』は19世紀イギリスの知的世界のあらわれであり、熊楠もそのなかで再考されるべきなのである。

注

1. 熊楠の著作は、英語/日本語を問わず、論考と呼ばれることが多い。現在の学術的な論文とは、あまりにもスタイルが異なるためである。
『N & Q』掲載論考については、平凡社全集版をテキストとして使用した。
『N & Q』誌上では、誤植や脱字がしばしば見られる。また熊楠自身が手元に届いた掲載号に訂正・加筆していることも少なくない。平凡社全集は、これらを反映した校訂版となっている。
日本語論考、書簡についても、平凡社全集版を使用した。
日記については、平凡社全集版、八坂書房版を参照の上、適宜、原資料に確認した。
『N & Q』の巻号数については、原則として発行日を示した。
2. 『南方熊楠英文論考〔ネイチャー〕誌篇』飯倉照平監修，集英社，2005年の解説。
田村義也「イタリア古説話との出会い - 南方熊楠の『ノーツ・アンド・クエリ

ーズ』誌第一投稿をめぐって」『ユリイカ』40巻1号，2008年。

雲藤等「南方熊楠の和文論文の役割 - 和文論文外部記憶装置説の試み」『熊楠研究』6，2004年，25-27頁。

『N & Q』と日本についての研究としては下記が挙げられる。

宮澤眞一「Notes & Queriesの日本関係記事にみる日英交流の推移」『埼玉女子短期大学研究紀要』4，1993年。

また現在、『南方熊楠英文論考〔ネイチャー〕誌篇』に続き、『〔ノーツ・アンド・クエリーズ〕誌篇』を翻訳中である。2010年出版予定。

3. 『N & Q』への投稿はすべてが掲載されたわけではない。不掲載と未掲載の二種類があり、不掲載は、既出、誌面に合わない等の理由で掲載を拒否されるもの。熊楠については、現在、1本のみが確認されている。未掲載は、誌面のスペースに余裕がなく、掲載を見送られるもの。重複した、あるいは時機を逸したりプライに多い。当座は見送りとなっても、投稿から半年～数年後に出た論考もある。熊楠について見れば、1904-1910年は特に多く、投稿の半数近くが未掲載となった時期もある。その後は購読者の激減によって、投稿総数が減ったため、未掲載論考が少なくなる。
4. いずれも1933年度分の予約金不払いのため、雑誌送付が打ち切られている。この年に購読をやめた理由については、体調の衰え、経済的事情などが考えられているが、まだ明確な理由は分かっていない。
5. 雲藤，前掲，25-27頁。
6. 『南方熊楠全集』別巻1巻，平凡社，1974年，549頁。
7. 上松翁宛書簡（1925年12月3日付）など、のちの熊楠の文章には、『N & Q』の特別寄稿家として予約金なしで投稿していたようなことが書かれているものがある。しかし、これは嘘か誇張のようである。少なくとも1902年以降は継続して予約金を払い込んでいることが確認される。
8. 『南方熊楠日記』2巻，八坂書房，1987年，49頁。
9. 同書，105頁。
10. 『南方熊楠英文論考〔ネイチャー〕誌篇』326-327頁。
11. 『南方熊楠全集』10巻，1973年，93頁。
12. 『南方熊楠全集』5巻，1972年，410頁。
13. 『南方熊楠全集』10巻，107頁。一部、省略した。

14. 『南方熊楠日記』2巻, 138頁。
15. 同書, 147頁。
16. 同書, 148頁。
17. 同書, 155頁。
18. 同書, 158頁。
19. 同書, 162頁。巽は横浜正金銀行ロンドン支店に勤め、和歌山出身者人脈を通して熊楠とも親交があった。巽孝之「シャーロック・ホームズの街で - 小泉信三、南方熊楠、巽孝之丞」『三田文学』94号, 2008年, 77頁。
20. 『南方熊楠日記』2巻, 163頁。
21. *Notes & Queries*, 22 December 1899, p. 464.
22. *Ibid.*, 1 September 1900, p. 163.
23. *Ibid.*, 14 February 1903, p. 126.
24. 『東洋学芸雑誌』は、1881年に『ネイチャー』を手本とした創刊された総合学術雑誌であった。
25. 『南方熊楠日記』3巻, 1988年, 166頁。
26. 同書, 167頁。
27. 同書, 168頁。
28. 同書, 174頁。
29. 『南方熊楠全集』3巻, 1971年, 10頁。
30. 同書, 10頁。
31. 『南方熊楠英文論考 〔ネイチャー〕誌篇』124-140頁。
32. A. Collingwood Lee, *The Decameron; its sources and analogues*, 1909, p. 234. ただし、「Mr. Kumagusa Minakata」と誤記されている。

附記 本稿は平成20年度南方熊楠研究奨励事業（若年研究者助成事業）による研究成果の一部である。

書 評

Cora Kaplan, *Victoriana: Histories, Fictions, Criticism* (Edinburgh: Edinburgh University Press, 2007)

平林 美都子

Victoriana: Histories, Fictions, Criticism (Edinburgh UP, 2007) の著者 Cora Kaplan は、*Aurora Leigh and Other Poems* (The Women's Press, 1978) の編者として、さらにその啓発的なイントロダクションによって名前を上げた。マルクス主義フェミニストであるカプランは *Aurora Leigh and Other Poems* のイントロダクションで、現代人がヴィクトリア朝に取り付かれていること、「階級、ジェンダー格差が恥ずかしげもなく表現された」「ヴィクトリア朝文学への欲求」(36) があることを指摘している。*Victoriana: Histories, Fictions, Criticism* においてカプランは、ヴィクトリア朝の小説や文化的アイコンに現代人がなぜ今なお引き付けられているのかを分析したが、彼女の問題意識の萌芽はすでに30年前に芽生えていたのである。

1960年代後半、フェミニスト運動の隆盛と脱植民地化の結果からヴィクトリア朝に対する新たな関心が芽生えてきた。そして、それ以後、ヴィクトリア朝小説の映画化や実在人物を登場人物にした虚構の小説など、ヴィクトリア朝を再現・再創造された作品が流行している。Jean Rhys の *Wide Sargasso Sea* (1966) や John Fowles の *The French Lieutenant's Woman* (1969) はその先駆けとなる作品である。Dana Shiller が neo-Victorian novel ("The Redemptive Past in the Neo-Victorian Novel"; *Studies in the Novel*, 1997) と名づけたこうした小説に関する研究書は、Suzanne Keen による *Romances of the Archive in Contemporary British Fiction* (U of Toronto, 2001)、John Thieme による *Postcolonial Con-Texts: Back to the Canon* (Continuum, 2001)、Jeanette King の *The Victorian Woman Question in Contemporary Feminist Fiction* (Palgrave,

2005)など、すでに多数出版されている。確かに *Victoriana: Histories, Fictions, Criticism* はこれらの研究書と重なる部分があるだろう。しかしカプランの関心は作品そのものというよりは、ヴィクトリアーナ、すなわちヴィクトリア朝文化に対する現代人の執着心であり、その問題意識は一貫している。彼女はヴィクトリア朝への執着心がノスタルジックな感傷からだけでは説明できないと考え、「我々が『歴史』として知っているもの[ヴィクトリア時代]は概念的なノマドとなり、絶えず変化して落ち着くことがなく」(3)、執着心は過去への我々の思いが常に変化していることの徴候だと論じる。「階級、ジェンダー、帝国、人種への関心」に加えて、「ヴィクトリア朝について書くことや読むことに伴う深い情緒」(5)に興味を持つカプランは、リメイクされた文学作品のみならず、ヴィクトリア朝作品の批評も分析し、現代人の徴候にメスを入れるのである。時折、彼女の話は自分の個人的体験へ流れることもあるものの、それによって議論が散漫になることはなく、むしろヴィクトリアーナの一つの例として読者を納得させてくれる。

本書は4つの章から構成されている。第一章は、“*Heroines, Hysteria and History: Jane Eyre and her Critics*”と題され、20世紀の批評が1840年代の女性作家の作品をどのように改訂したのかを論じる。カプランは、ヴィクトリア朝への執着心をフロイトのヒステリー患者と類似的にとらえることで、過去の文化的産物を強迫観念のようにリサイクルしていると言い、「記憶のシンボル」である『ジェイン・エア』の批評史をたどる。彼女はまず、Virginia Woolf と Raymond Williams という批評的立場の異なる二人が、いずれも『ジェイン・エア』の中のブロンテ自身の感情的な声に反応していることを明らかにする。都会のエリートであるウルフによれば、ジェイン/ブロンテの主體的・怒りの声はストーリーを中断するものであり、女性による近代小説の可能性を阻むことになるのだ。30年後、労働者階級出身のウィリアムズは、ブロンテの願望は一般人の願望だとしてそこに近代小説の要素を認めながらも、現代の読者のジェンダーを考えれば、女家庭教師の「絶望的イメージ」には問題があると結論づけた。

その後、Elaine Showalter、Sandra GilbertとSusan Gubar、Nancy Armstrong、Gayatri Spivakらの『ジェイン・エア』批評が俎上に載せられていく。カプランの狙いは「批評も、想像的文学作品のように感情的な歴史を持つものとし

て議論」(25)することである。本書の第一章の締めくくりは、Paula Rego が描いた『ジェイン・エア』の挿絵の分析である (*Jane Eyre*. Introduction by Marina Warner, Enitharmon Editions, 2003)。 *Victoriana: Histories, Fictions, Criticism* の表紙絵にも使用されていることから、カプランがレゴの描く(解釈する)ジェインに啓発されたのは間違いないだろう。レゴのジェインはすべて成人女性の姿で、ときにはバーサを髣髴させる像を描いていく。カプランによれば、レゴのジェイン像は『ジェイン・エア』という記憶のシンボルが問題を孕み、テキストと読者(批評家)との間で喚起される感情が浮遊し続けることを物語っているのである。

続く“*Biographilia*”は質量ともに本書の中心となる章である。*Biographilia* は *Biography*(伝記)と *philia*(病的な愛好)を合体した造語だ。ここでカプランは、20世紀後半の伝記の流行に分析の目を向ける。1960年と70年代には、バルトやフーコーがそれぞれの批評的立場から「作者の死」を宣言したが、1990年代からポストモダニズムへの反発から「抑圧された主体・作者の回帰として、(作家の)伝記の再評価が行われた」(40)とカプランは説明する。フェミニストたちによる女性作家の発掘のプロジェクトは、ヴィクトリア朝の男性作家への新たな関心を引き起こした。しかし、ここで扱われる「伝記小説」は、A.S. Byatt の *The Biographer's Tale* (2001) で明らかにされるように、「心理面、社会面、言説面で非決定性の網の目」(44-45)に捕らわれた作品、いいかえれば、事実とフィクションの混合(バイオフィクション)である。Peter Ackroyd の *Dickens* (1990) が取り上げられるのもそのためである。カプランが「アクロイドのおべっかめいた口調の中に[ディケンズを]ライバル視するサブテキストの音がざわめいている」(57)と言うように、『ディケンズ』の分析で明らかにされるのは、アクロイドがいかにディケンズに捕らわれているのか、という点である。伝記作家としてのアクロイドは、読者よりもむしろディケンズの関心を引きたいのではないかとまでカプランは言う。

第三章の“*Historical Fictions: Pastiche, Politics and Pleasure*”では4人の作家(John Fowles, A.S. Byatt, David Lodge, Sarah Waters)の小説が分析される。その中で、バイアット、ロッジ、ウォーターズに共通しているのは、現在の大学の英文学部がプロット上あるいは創作の方法に深く関係していることである。しかし、ヴィクトリア朝を扱った小説の創作方法がいかなるものであ

れ、こうした小説には「読者の情緒的反応を生み出すようなものへの言及」(115)があり、カプランの関心は読者へ向かっていく。そして彼女はバルトの『テキストの快楽』の「時代錯誤的な主体」を持ち出し、二重に引き裂かれ、二重に倒錯する「時代錯誤的な主体」こそ、こうした小説にふさわしい読者だと論じるのである。このあたりのカプランの議論はやや強引に見えるかもしれないが、ヴィクトリアーナの徴候を検証する彼女にとって、必然的な展開だといえよう。

ヴィクトリア朝を再現した作品の最後の例として、第4章では Jane Campion の *The Piano* (1993) が取り上げられている。『ピアノ』はすでに多くのところで批評され、カプランの議論そのものもとりたてて目新しいものではない。しかしヴィクトリアーナへの彼女の関心はぶれることがない。カプランは『ピアノ』を現代におけるヴィクトリア朝のリサイクルとしてとらえ、Peter Brooks のメロドラマ論に依拠し、映画に見られるヴィクトリア朝の執拗なりサイクルは一種のヒステリー徴候のメロドラマと捉えることもできる、と説明する。

本書の各章はそれぞれが独立しているため、文献一覧がないという不満も残る。しかし、だからといって本書の価値が下がるわけではない。カプランのヴィクトリアーナの分析は緻密で一貫性がある。本書を読み終えた今振り返ってみれば、現代人のコンテクストからヴィクトリア朝の時代・文化を批評する我々ヴィクトリア朝研究家は、創造的な書き換えをする小説家や画家と近いといえるかもしれない。バルトの言う「時代錯誤的主体」となりながらヴィクトリア朝へ魅了され続けるのは、我々に共通する徴候ともいえるのだろう。本書は副産物として、そうした現在の批評的土壌を検証することの必要性を我々に考えさせてくれるのである。

書 評

Elizabeth Gargano, *Reading Victorian Schoolrooms: Childhood and Education in Nineteenth-Century Fiction* (New York: Routledge, 2008)

玉井 史絵

教育と文学というのは旧いようで新しい話題である。これまでも、英文学教育の歴史、女性教育と読書、労働者階級の教育と読書文化、文学のなかに描かれる教育など、様々な側面からヴィクトリア朝における教育と文学は論じられてきた。近年に出版されたものとしては、Brontë 姉妹の小説を通して見た当時の教育について詳細に論じた Marianne Thormählen の *The Brontës and Education* (CUP, 2007)、労働者階級の Shakespeare 受容を検討した Andrew Murphy の *Shakespeare for the People: Working Class Readers, 1800-1900* (CUP, 2008)、知識偏重の教育への文学の側からの批判を分析した Dinah Birch の *Our Victorian Education* (Blackwell, 2008) などがある。ヴィクトリア朝文学における様々な学校の表象を考察した Elizabeth Gargano の *Reading Victorian Schoolrooms: Childhood and Education in Nineteenth-Century Fiction* (Routledge: 2008) は、なかでもとりわけ興味深い。

ヴィクトリア朝は教育が国家の制度として確立していった時代である。Gargano は学校を描いた文学のなかに、規格化、標準化、画一化が進む学校教育と、そうした動きにそぐわない家庭での教育との相克を読み取る。小説家は、学校という空間に様々な家庭の要素を織り交ぜて描くことにより、非人間的な公教育の画一化を批判したというのが、彼女の議論の骨子である。Henri Lefebvre の空間論などに依拠しつつ、教師の部屋、校庭、医務室といった空間の表象を軸として小説に描かれた学校を分析しているのが、本書の特徴だ。

第一章では、学校建築とその背後にある教育哲学との関連を考察している。

ここでは、直線的で簡素な新ジョージ王朝様式が学校にふさわしいと論じた *School Architecture* (1874) の著者 E. R. Robson と、ゴシック的な建築を理想とした、Saint Mark & Training College の校長、Derwent Coleridge が対比される。一つの物事から次々に連想が触発されることで精神は発達するとした Hume の哲学は、19世紀の教育理論に多大な影響を与えたが、Robson にとっての学校とは、そのような子供の直線的な発達を促す場にほかならなかった。一方、Coleridge にとって教育は古典的リベラル・アーツであり、教会と深く結びついたゴシック的な建築様式こそがその理想を体現していたのであった。Gargano はさらに、*Hard Times* 論を展開し、直線的な Gradgrind の学校空間に、画一的教育への Dickens の批判が表れていると主張する。

以下の章は、学校における個別の空間表象が考察される。第二章では、教師の部屋という空間が分析の対象となる。厳格な規律が支配する教室とは対照的に、教師の部屋は生徒と教師が擬似家族のようなつながりによって結ばれ、生徒が個人として尊重される場として描かれる。ひとつひとつの目に見えるカリキュラムによって構成される学校教育とは異なり、家庭教育は包括的であり、神秘的である。それゆえ、*Jane Eyre* における Miss Temple の部屋や *David Copperfield* における Dr. Strong の学校は、神聖な家庭的空間を創造することで、非人間的な学校教育に対する反証として機能しうのだ。だが、商業主義の支配する社会にあって、家庭教育は実現不可能な理想でしかありえないという矛盾をはらんでいるとも、Gargano は指摘する。第三章では、校庭の果たす役割が考察される。制度として厳格に規格化された公教育の場において、校庭は自然が取り込まれる場所である。*Tom Brown's School-days* のように男子教育が主題となっている作品では、男子生徒が自身の内にある野生的性質を制御し、やがては自然を所有物として統制する力を養う場として、校庭が描かれる。一方、女子生徒の場合、校庭はみずからが男性の所有物であることを学ぶ空間であるが、*Jane Eyre* のような作品では、男性の支配に抗う女性の本性が発露する場と化す。だが、そのいずれにおいても、校庭の自然は、規格化された公教育を正す役割を担っているというのが、この章の結論である。最終章で取り上げられるのは医務室だ。Herbert Spencer は過度の教育は身体的退化、病的感情、愚鈍といった様々な病理を生み出すと論じた。*Dombey and Son* の Paul Dombey、*Tom Brown's Schooldays* の George

Arthur といった敏感な子供たちは、そのような教育の過ちの結果として病にかかる。医務室は家庭的な教育が回復される空間であり、画一化が進む学校教育に対する教師や親たちの最後の抵抗の場となるという結論に達して、本書は締めくくられる。

教育と文学というのは旧いようで新しい話題である、この書評の冒頭に述べた。教育とはいつの時代においても人々の関心事でありながらも、その関心のあり方は時代とともに変遷する。たとえば、Richard D. Altick の *The English Common Reader: A Social History of the Mass Reading Public, 1800-1900* (U of Chicago Press, 1957; 2d. ed., Ohio UP, 1998) は、19世紀イギリスにおける労働者階級の読書文化について論じたものである。Altick の関心が知識の一般大衆への普及のプロセスに向けられたのは、この本を執筆した1950年代が、高等教育の大衆化の時代だったからであろう。それから50年あまりを経た現在、Gargano が追及するのは、19世紀の文学が画一化、規格化されていく公教育をいかに批判したかというテーマである。このテーマは、効率性を求められる教育現場において文学の役割を模索する多くの文学研究者たちの、切実な問題意識の反映といえよう。その意味で、教育空間の表象と教育の思想・哲学を論じた第一章はとりわけ興味深い。私たちが日常の教育活動のなかで自明のこととして受け入れている、机が教卓と対峙して直線的に並ぶ教室という空間は、実は子供・生徒・学生の直線的発達を前提とする教育思想の反映なのだということに、Gargano は気づかせてくれる。文学はそうした空間を批判的に描くことで、直線的発達では説明できない、より複雑で有機的な成長のあり方が存在することを訴えようとしたという彼女の議論は興味深い。彼女はさらに、文学の社会批判は現実の社会を変える力にもなりえたと主張する。彼女は、*Nicholas Nickleby* の Dotheboys Hall や *Jane Eyre* の Lowood の描写が、学校の劣悪な教育や衛生環境に対する世論の批判を高めた例を挙げて、「小説家はレンガと漆喰ではなく、言葉によって学校を形作ったが、それにもかかわらず、現実の実質的な組織にも直接的な影響を及ぼした」(5)と述べている。このように社会への批判力としての文学の機能を擁護する議論は、文学の存在価値が疑問視されつつある今日の教育現場において、重要な意義を持っていると言えよう。

Gargano の論旨に共感を覚える一方で、疑問をはさむ余地があることもま

た、指摘しておかなくてはならない。彼女は画一化、規格化された制度としての公教育に対する、文学の側からの批判という側面を強調するあまりに、小説家たちが教育の画一化、規格化に時には積極的に関わっていたという事実を見逃している。「ヴィクトリア朝の小説家たちは、魂のない標準化された教育から労働者階級の子供たちを守ろうとした。それはひとつには、そのような標準化が中流階級の子供たちにとって、潜在的な脅威となることを彼らが認識していたからにちがいない」(5)と Gargano は論じている。だが、たとえば、Dickens は確かに *Hard Times* や *Our Mutual Friend* のなかで、労働者階級の画一的教育に対して厳しい批判を展開したが、*Household Words* や *All the Year Round* などのジャーナリズムでは、逆にそれを擁護し、推進する立場を取っていた。これら二つの雑誌に掲載された彼自身や他の記者の手による貧民学校や救貧院学校などの記事を見る限りにおいては、Gargano の主張を補強するような記述を見つけることはできない。教育と文学の関わりは決して一様ではない。文学は時には公教育を批判し、また時には公教育のなかに巧みに入り込むという、したたかな戦術を使いこなしていたのではないだろうか？ そのしたたかな戦術を分析するには、Gargano の呈示した学校教育と家庭教育の相克という図式以上の複雑な構図を想定しなければならないだろう。また、小説家たちの小説を超えた現実社会での教育に対する取り組みをも検討する必要がある。

このような問題点をはらみながらも、本書が教育と文学に関する研究の新たな展開を生み出すものであることは間違いない。教育における文学の意義とは何か？ 人文学が危機的状況にある現在だからこそ、私たちは今一度この問題を真摯に受け止める必要がある。本書のような研究書は、私たちが教育とは何か、文学がどのように教育に関わっているかを考えるうえで助けとなる、様々な指針を与えてくれるだろう。